

名づけの認知科学(1)——語彙の体系と名づけ——

雨 宮 俊 彦

The Cognitive Science of Naming (1): Lexical Structure and Naming

Toshihiko AMEMIYA

Abstract

The problems of naming have been the subject matter in many disciplines: Linguistics, Cultural Anthropology, Philosophy, Psychology, and so on. Yet a comprehensive theoretical frame is still lacking and many studies remain fragmentary. This series of papers tries to provide a cognitive scientific perspective on the naming phenomena. The present paper compares the two views of word meaning: i. e., the classical view as embodied in WordNet and cognitive linguistic view. It is shown that there are several aspects in word meaning. The classical view focuses on the basic static hierarchical word-word relational aspects of meaning. Contrarily the cognitive linguistic view focuses on dynamic word-world interfacial aspects of meaning. Naming is a phenomenon that has much to do with the latter aspects of meaning and it is a factor which restructure the static hierarchies of word meaning as ever.

Key Words: Naming, Onomastics, Proper Name, Prototype, Cognitive Linguistics, Iconicity, Thesaurus, Relational Lexical Semantics, WordNet

抄 録

名づけの問題は、言語学、文化人類学、哲学、心理学など、おおくの分野の研究対象となってきたが、名づけをあつかう統合的や枠組みがないために、研究は断片的なものにとどまっている。本論文のシリーズでは、名づけの現象に認知科学的なみとをしを提供することをこころみる。今回は、言葉の意味について、ワードネットに具体化されているような古典的な見方と認知言語学の見方を比較した。言葉の意味には、さまざまな側面がある。古典的な見方は、言葉の意味における、言葉と言葉の基本的な関係にかかわる静的で階層的な側面に焦点をあてるのにたいし、認知言語学の見方は、言葉と世界のインターフェースのよりダイナミックな側面に焦点をあてる。名づけは、おもに言葉の意味の、後者の側面と関連した現象であり、固定的で階層的な言葉の意味の体系のあちこちをつねに変化させていくちからである。

キーワード：名づけ、固有名詞学、固有名詞、プロトタイプ、認知言語学、類像性、シソーラス、関係的語彙意味論、ワードネット

はじめに

“What’s in a name? that which we call a rose, by other any name would smell as sweet.” (Romeo and Juliet : Act 2, Scene 2, William Shakespear)

Juliet のうったえとおりの名前は、たんに名前である。名前がかわったからといって、名ざされる対象や出来事の性質がかわるわけではない。Romeo の名前がかわっても、Romeo は Romeo である。Juliet の語源が Jilt だからといって(ウィークリー1987), Juliet が Jilt なわけではない。Rose を、「ばら」とよんでも、「薔薇」や「バラ」, 「ローズ」とかいても、Rose の甘い香りにかわりはない。名前をかえても、対象や出来事の性質そのものはかわらない。もしかわるとしたら、それは魔術である。

名前によっては、対象や出来事の性質そのものはかわらない。しかし、人間のうけとりかたはかわってくる。大久保(1953)は、都合のわるいことをうまい言葉で印象よくみせようとする「名づけによる魔術」を指摘している。「侵略」を「予防戦争」とよんだり、「ユダヤ人の大虐殺」を「ユダヤ人問題の最終解決」, 「混血児」を「国際児」, 最近では、「非管理売春」を「援助交際」, 「ごみ捨て場」を「夢の島」とよぶなどである。あるいは、おなじ犯罪行為でも、「レイプ」か、「強姦」か、「てごめ」かでは、悪さの印象がことなるのではないだろうか。唇をあわせる行為を提案する場合でも、「キス」というか、「接吻」というか、「口吸い」というかで、受諾率はだいぶことなりそうである。また、「アリストテレスは大地が球形であると推論した。」といえは鮮明につたわる驚きも、「アリストテレスは地球が球形であると推論した。」では、馬から落ちて落馬したとか、お腹が腹痛だったみたいなの、お間抜けなかんじがしてしまう(宮原1998)。

人間は、バラの花の色をみて、その香りをかぎ、手にとるなど、外の世界の対象に、言葉をかいさず、感覚・運動的にかかわり、それを認識、記憶し、それにもとづきおなじ色のバラをあつめるなどの行動のコントロールもできる。しかし、その認識を人につたえたり、組織化するためには、名前と、名前をつかった言葉によるコミュニケーションや思考が必要となる。

ヴィゴツキー(1963)は、人間の思考が言葉による自分との対話であるとし、それを内言とよび、他者とのコミュニケーションである外言と対比的に位置づけた。ヴィゴツキーによると、思考としての内言は、そのひとが属する言語集団における外言が内部化されたも

のである。内言は、個人の内部で、「えーっと、あれはこうだから」などと、省略された言葉で、外には声をださずに、イメージを想起、操作しながら展開される。(幼児では、実際に外に声をだすひとりごととして、内言が展開される。大人でも困難な課題や心理的余裕のないときなどには、幼児とおなじになる。また、共有事項のおおい、親しいひととの外言も、ときには、省略された言葉による内言の様相をていすることがある。) ヴィゴツキーは、言葉とは別個に内面的個人的な思考があつて、それが言葉で表現されるのではなく、外言によって集団的に共有される言葉をつうじて個人の思考が形成されるとした。個人の思考は、集団におけるコミュニケーションに依存して形成、存続されていくものである。

言語と思考にかんするヴィゴツキーの思想のもうひとつのポイントが、言葉を、道具とおなじく人間の行為を媒介する手段、しかし外の世界ではなく、人間の心に働きかける、心理的な道具として位置づけるかんがえである(ヴィゴツキー1987)。これは、プラトンが「クラテュロス」ではじめてとなえ、ピューラーのオルガノン説などにひきつがれる。ヴィゴツキーの心理的道具説は、プラトン、ピューラーのながれをうけついで展開である。ヴィゴツキーの思想のうち、言語的思考の外部と内部の弁証法はその後、おおいに着目され展開された(ワーチ1995)。ヴィゴツキールネッサンスといわれるなかで、言語の心理的道具説は、あまり着目、展開されていない。しかし、言語と思考にかんするヴィゴツキーの思想は、外言・内言説と、心理的道具説の両方をむすびつけて、はじめて、あきらかにでき、その可能性を展開することもできる。

プラトンの「クラテュロス」は、名前の正しさをテーマにした、西欧最古の言語学の文献だが、今日よんでもなかなか刺激的である。登場人物はヘルモゲネス、クラテュロス、ソクラテスの三人である。ヘルモゲネスは言葉の意味はとりきめによると主張する。クラテュロスは物事には本来の正しい名前があると主張する。ソクラテスは、両者の間にあって、おもにヘルモゲネスのかんがえを論駁していくので、ややクラテュロスにちかきようにもみえるが、クラテュラスのかんがえも論駁している。名前と概念の区別は十分ではないが、素朴な本来の正しい名前といったかんがえからは一応距離をとっており、言葉を機能的にみる立場から言葉の道具説をいったり、語源議論をくりひろげたり、言葉は音声ジェスチャーだといったりする。名前と概念の区別の不十分さは、ギリシア時代の限界だが、音声ジェスチャー説などの言語の機能的な位置づけなどには、現代の主流派の言語学で、発展させられなかった発想がみられる。

以下は、「クラテュロス」における、言葉の道具説にかんするソクラテスの発言である。

「従って、名づける場合も——さっき言われたことに一致するように言おうとするならば——われわれの欲するままに名づけるべきではなくて、事物を名づける作用と事物が名づけられる作用の本性に合うしかたで、本性に合う道具を用いて、名づけるべきではないだろうか。そしてそのようにするならば、われわれはそのことに成功し、名づけたことになるだろうが、そうでないと反対の結果になるのではないだろうか。」(プラトン1974, P17)

ソシユール以来の言語学は、ヘルモゲネスの立場にたっており、言語記号が恣意的であり、自然な有縁性をかいているという主張を第一原理としてきた。最近の言語学の展開で興味ふかいは、音象徴研究や、言語のアイコシティー研究、認知言語学などの領域で、言語記号の有縁性が組織的にあきらかにされつつあることである (Hiraga 1994, Waugh, L, R. 1994)。言語記号のかなりの部分には、あきらかな有縁性があり、研究の今日の段階で、言語記号の恣意性のみを主張することは、ふるい言語学への固執でしかない (菅野1999)。言語記号に自然な有縁性があるとすれば、クラテュロスのように本性にもとづく名前の正しさとはいえないまでも (プラトンの他の対話編とおなじく、クラテュロスは実在の人物だが、晩年には、言葉への不信からいっさい言葉を発せず、身ぶりのみもちいたとつたえられている。), 名前の適切性や有効性を機能的に問うことは可能になる。音象徴研究や、言語のアイコシティー研究、認知言語学がどのように言葉の有縁性をあきらかにしてきたかは、名づけの理論的基礎にかかわる問題である。ここでは、論点のみを指摘し、具体的な説明と検討は、また、あとでおこなう。

はなしが、理論の要点ばかりになってしまった。たとえば、ヴィゴツキーの外的コミュニケーションの内部化説と言葉の心理的道具説を、具体的に適用すれば、どうなるだろうか。「でたらめな言葉の使用によってでたらめなかんがえが形成されるのであって、かんがえがでたらめだからでたらめな言葉をつかうのではない」などといったことがいえる。最近、国会の委員会で、質疑応答の形式が改善された。そのこと自体は、たいへん結構なのだが、質問時間を「クエスチョン・タイム」と名づけて首相が紹介したのには、あらためて脱力感をかんじてしまった。なんでもっと簡単に、質問時間といえないのか。やくざな広告業者のようなものいいをして、恥ずかしくないのだろうか。政府には、日本語の感覚や国語愛がないのだろうか。こんな苦情をいうと、霞ヶ関の官僚は官僚で、「国会委員会等に於ける政府委員、議員の質疑応答等に関わる用語等への疑義に対応する整備の案件に附いての政府見解。」などと返答をしかねない。こうした言葉のつかいかたを (イアン・アーシー1996)、箔がつくというのだろうか、霞ヶ関にならって、いろんな組織でまねをしたり

する。学者も、戦前の西田哲学における「絶対矛盾の自己同一」といった、お経のような日本語をわらってもいられない。「関係性のなかにおける多様性の実現」などという、なんだかぼわーっとして、ありがたくて、いいことみたいだ。しかし、「関わりの中でのいろんなあり方」というと、それ自体、良くも悪くもないことが明白である。じゃあ実際には、どんな関わりだ、くされ縁か、助け合いか、どんなあり方だ、子分か、友達か、などの地に足ついた検討になる。日本における社会学者のある部分は、あいかわらず、漢語のカードでつくった家で、救済のお祈りをしているのではないだろうか (宮原1998)。

人間の認識は、事物とイメージと名前の三者のダイナミズムからなっている。事物は外の世界にあり、事物を共有している人間は、人間という種に共通の感覚・運動系で、たとえば、バラの花の色をみて、その香りをかぎ、手にとるなど、その事物にアクセスできる。名前は、「バラ」という言葉の発音と表記、複合語や派生語、使用可能な文脈とその文例群、植物である・灌木である・刺がある・花卉の多い花がさく・香りがつよいなどの基本的な属性などである。これらが、コミュニケーションをつうじて、言語集団に共有される。イメージは、事物と名前のあいだにあって、内的な側面がつよい。事物のように指示によって共通の指示対象であることを確認したり、名前のようにコミュニケーションをつうじて直接共有されることもない。しかし、人間の認識にとってかくことのできないのは、対象や出来事のイメージである。

イメージは、像と情緒的色合いの複合である。像は、事物の典型的知覚像、あるいは、プロトタイプである。指示される事物の直接経験にもとづく知覚像なしに、関連する言葉やその指示対象の知覚像にもとづいて、像が形成されることもある。情緒的色合いは、像に付与された情緒的な評価成分である。たとえば、「おおかみ」とか「さめ」などの像は、それぞれのプロトタイプイメージで、情緒的色合いは、「危険な」、「どう猛な」などの情緒的評価である。情緒的色合いは、ひとによってまったくことなることがある。たとえば、「おおかみ」について、おおくのひとは「孤独な」といった情緒的評価をもつかもしいないが、動物行動の専門家は「群居の」といったちがう情緒的評価をするだろう。また、「神」、「不死性」、「愛」、「多様性」、「個性」、「悪魔」、「反動」など、イメージの像成分が明確でない言葉もある。これらの言葉では、イメージにおける情緒的意味あいを中心となって、社会的な役割をはたす。情緒的成分は、オスグッドが考案した、SD法 (Semantic Differential) が測定の対象としているものである (Osgood, C. E., Suci, G. E., and Tannenbaum, P. H. 1957)。イメージの情緒的成分における第一成分は、プラスかマイナスの評価成分で

ある。これを荷重として抽出し、笑いなどの認知現象や社会的相互作用を荷重の力学としてとらえようとしたのが、荷重にもとづく笑いや羞恥の理論(木村1983, 木村1995), それに、ソシオンの理論(雨宮・木村・藤沢1993)である。イメージにおける、像と情緒的色合い、荷重については、ややこしい問題や議論すべき点がおおいので、稿をあらためて論ずることにする。ここでは、イメージが像と情緒的色合いの複合で、情緒的色合いが事物への人間の態度と行動をきめるうえで重要であるということを確認して、事物の直接経験と名前の対応にはなしをすすめる。

対象や出来事によっては、事物の直接的経験がかけている場合もあれば、名前のかけている場合もある。

たとえば、「ペガサス」は架空の動物なので、ペガサスを直接経験したひとはいない。しかし、「ペガサスの絵」や「ペガサスの物語」など、「ペガサス」をふくんだ複合的言語表現の対象は、たしかに存在する(Goodman, N. 1987)。名前は、言葉の網の目による対象や出来事の指示の要素としてくみこまれるので、その名前の対象の直接的経験がなくとも、名前は、言葉の網の目の要素としての意味はもちうる。「ペガサス」や「龍」、「鬼」、「神様」、「あたり」、「靈魂」など架空の事物や抽象的な存在の名前の意味は、直接の指示によってではなく、言葉の網の目をつうじて間接的に規定される。

小説家の三島由紀夫は、ほんとかうそかしらないが、大人になるまで、松の木を直接みたことがなかったといっていたそうだ。三島の小説では、松の木はたんなる舞台装置だろう。松の木にかんする日本文学における慣用的表現や作品などをたっぷりしっていて、松をふくむ言葉の網の目は熟知してつかいこなせば、言葉主導の文学はそれでいいということが、いいかかったのかもしれない。言語学者で東洋学者のミューラーは、「空があるとか、それが青色であるかということはどうして知るのだろうか。そのための名前を知らなければ、われわれは空の存在を知るだろうか。」などといっている。(アダマール1990, P82) 三島やミューラーなどの直接的経験を軽視した言葉主導の認知スタイルは極端なものだが、人間の認識が言葉の網の目のなかでいとなまれることの例証ではある。

名づけられていない対象や出来事は、無数にある。宮沢賢治は、童話のなかでカエルに空の色を「ああ、あそこはベネタ色だねえ」などといわせているが、夕方の空の色の様子的変化などは非常にバラエティーにとんでいて、ニュアンスを区別しつつ名づけたら数百の名前が必要になりそうである。グッドマンが帰納にかんする議論で提案しているように(グッドマン1987), ある時点まで、緑で、その後、青にかわる色にたいして、みどお色な

どという名前をつけることもできる。エスキモーなどは、種々の雪について数十の名前を区別してついている。一方、日本語には、氷雨、村雨、時雨、驟雨、小糠雨、天気雨、梅雨、麦雨、白雨、など種々の雨の名前が非常におおい(金田一1988)。風のふきかたをいろいろに名づけている言語もあるかもしれない。こうかんがえると、名づけられる対象や出来事にかぎりはないことがわかる。

直接の経験があっても、名づけられていない対象や出来事は、人間の認識には定着しにくいところがある。日常みかける植物などでも、名もない花などといっているのでは、その花をみたり、つんだりした直接の経験があっても、記憶のなかでそのイメージをラベルとしての名前で繰り、操作することができず、また人とのコミュニケーションで共有することもできない。このような名前によって操作しコミュニケーションできない対象や出来事は、認識の図の領域にくみこまれることなく、私的な地の領域の経験として背景にすんでしまうようだ。「時計草」とか「馬酔木」とか、名前をして、それを人とのコミュニケーションにもちい、はじめて共同の言葉によって形成される認識の図の領域の要素としてくみこまれる。

人間がさまざまな対象や出来事に名前をつけようとするのは、以上のような理由からだろう。吉村(1995)は、まだ既成の名前がない(と調査者が判断した)現象に名前をつけるようにもめた命名調査の結果を報告している。被験者は、大学生73名。名づけ課題は以下の五つである。

- (1)通勤、通学などで、最寄りの駅などに一家の主婦(または夫)が夫(または妻)や子どもを車で送り迎えすること。
- (2)一人がバイクにのって、横をはしる自転車のもう一人を押しながら並んで走る。
- (3)一つのCDラジカセに、ふたりでイヤホンをひとつずつつけて、いっしょに聴く。
- (4)ニューヨークではやっているジーパンの前後を逆にしてはくファッション。
- (5)パトカーの前はがら空きなのに、その後を制限速度をまもってのはしる車の列。

興味ふかいは、五課題中四つには、つかわれている範囲がせまく、知っている人が少ないとはいえ、すでにコミュニケーションでもちいられる既成の名前があることが判明したことである。(1)「キス(アンド)ライド」、(2)「けん引き」または「けつ押し」、(4)「クリス・クロス」、(5)「パレード」または「大名行列」、である。(1)と(4)はアメリカでの名前が日本につたわったものである。(4)は、ジーパンを後ろ前にはくアメリカの歌手グループの名前からの命名である。(2)は(5)よりつかわれる範囲はせまいらしい。(5)には、創作命名

として、「パトカー渋滞」、「じゃまパト」、「たてまえ走行」、「ねずみの行列」、「風よけ」、「将軍のお散歩」などの回答がよせられている。「将軍のお散歩」とよんだ人は、よほど違反キップをきられてでもいるのだろうか。

名前をつけることが有効なのは、ひとつのまとまりとしてラベルをつけるにたる対象や出来事にたいしてだけである。ラベルの必要性は名前がつかわれる言語集団でのコミュニケーションの内容に依存する。「けん引き」とか「けつ押し」などという言葉が有効なのは、「今日のかえりまたけん引きたのまあ」、「おう、けつ押ししか、まかせとけ」などという会話を日常的にする、順法精神にとぼしい集団のなかだけだろう。しかし、こうした違法走行が一般化したり、社会現象化、あるいは社会問題化すると、「けん引き」とか「けつ押し」という言葉が、「茶髪」とか「ガングロ」などのように、日本語の新語として一般化することになる。これらの新語は、名ざす対象や出来事が、どの程度社会的に着目されつつあるかと、栄枯盛衰をともにし、対象や出来事がすたれるとともに死語となるものもあれば、一般性のある新語彙として定着していくものもある。

また、上の(2)や(5)のように、おなじ対象や出来事に複数の名前が併存し競合する場合もある。このような場合には、言語集団によって不適当とされた名前はつかわれず淘汰されて、ある名前がのこるということになる。たとえば、国鉄民営化のさいに、うまれた「E電」と「JR」の名前は、当初、両方とも評判はいまひとつだったが(木通1990)、そのうち「E電」はまったくつかわれなくなり、「JR」は定着するにいたった。「JR」は、「JA」、「JRA」などの頭文字名(Acronym)とおなじく、あまりわかりやすい名前とはいえない。しかし、やや公共的な組織の名称にふさわしいと判断されるようになったからだろう。一方、「E電」は、発音の上品さがきらわれたのにくわえ、アルファベット+漢字の名前が、鉄道の路線名としてはふさわしくないと判断されたからだろう。

以上のように、ある種の名前の一群は、自然発生的につけられ、言語集団にとっての名づけの対象の重要度や、名前の適切性によって淘汰されていく。もう一方には、制度的に正式な名前が付与され固定されている場合もある。人につけられる名前であれば、あだなが自然発生的な名前、本名が制度的な名前である。小説のなかのはなしだが、夏目漱石の「坊ちゃん」がつけた、「赤シャツ」、「うらなり」、「山嵐」などは秀逸な名づけである。現実こんなあだながあったら、山嵐の本名が五十嵐だから、「いがちゃん」などとほかに自然発生的につけられるだろうあだ名と競合して、あだ名をつかう人の言語集団のなかで楽にいきのこっていくだろう。一方、本名は、一度、名づけられると制度的に固定される

もので、不適切と判断されても簡単には変更できず、名前をつけられた人を苦しめることもある。寿岳(1979)は、つぎのような身の上相談の記事を紹介している。

「二十八歳の未婚女性です。いままで何度も結婚話があったのですが、いつも最後になって名前がおかしいからとまとまりませんでした。わたしの名前はカメ子というのです。この名前のために若い頃自殺未遂で親を心配させたこともありました。ある人と知り合い愛するようになったのに、その人は親にわたしの名前をどうしてもいえないといってわたしから離れていったのです。一生わたしから離れないこの名前のために恋愛もできないのかと、一時は親を恨みましたが、もう結婚の夢をみることなく一生独身で過ごそうとあきらめていました。働く意欲もなくなり、独断で会社をやめ、いまひとりでアパート生活をしています。生活のメドもつかないまま、また死ぬ勇気もなくボーッとすごす自分が哀れで、何とか名前を変えて再出発したいとペンをとりました。わたしの考えは甘いでしょうか。いまの苦しみからなんとかのがれたいのです。名前を変える理由にならないでしょうか。もし、変えられるとしたら、どこで手続きしたらいいでしょうか。」(大阪府・カメ子)〔読売新聞〕昭和38年3月26日)

これにたいし、回答者は、むづかしいかもしれないが家裁に相談して名前の変更が可能かしらべる。戸籍上の変更ができなかったとしても、実生活では、「カメ子」を「香女子」や「香芽子」などとする。ツルやカメはめでたいとして明治時代にはたくさんあった女子名だから、気にせず生きていったら、名前など気にしない人ともめぐりあえるだろう。などとアドバイスしている。

カメ子の悩みがしめすように、ジュリエットのうったえにもかかわらず、名前はたんに名前ではない。こっけいな名前は、名づけられている人を、こっけいにおもわせてしまう。名前は、社会的な場における人間の心理のなかで、名づけられている対象と融合して位置づけられてしまう。下品な言葉は、言葉自体がけがれているようにおもえる。「せんずり」とか、「すけこまし」とか、広辞苑にでていない言葉だが、言葉への認識をふかめるために、語彙の問題として言及するにしても、教室でいうにはちょっとした勇気がある。逆に、「愛」とか、「個性」とか、ありがたい言葉をつかって、でたらめな行動をしながらも、「愛がすべて」とか「個性が大切だ」とかいう、ありがたいラベルで、でたらめな行動を包装し、立派なことなんだと、しゃあしゃあと主張できたりする。

名前のもつイメージ、とくにその情緒的色合いと、名づけられた対象や出来事そのものを、混同し、融合して理解するのは、昔の人や子ども(レヴィ・ブルユル1957、ピアジ

エ1977)ばかりのことではない、基本的には現代人もおなじである。

昔の人は、さらに、悪霊の存在を信じていたので、名前の管理にはずいぶん気をつかい、悪霊とのあいだに虚々実々の名づけ合戦をくりひろげた。

たとえば、豊臣秀吉は、淀君とのあいだにやっとさずかった最初の子どもに「棄丸」と名づけた。乳幼児死亡率のたかかった当時には、厄年生まれの子どもは、一度わざと捨てて、拾ってもらい、「捨て」とか「拾い」と名づける風習があった。これは、病魔に眼をつけられないように、関心をそらすようにという、親の願いからの名づけである。秀吉の「棄丸」も、そうした願いからの名づけである。しかし、棄丸は夭折してしまった。つぎにうまれた子ども(後の秀頼)には、「拾い」と名づけた。秀吉は、陣中からつぎのような指示を手紙でだしている。

「その名はひろいと可申候。下じもまで、おの字つけ候まじく候。ひろいひろいと可申候。」
(豊鏡)

おつきが、うっかり、御をつけて、「御ひろいさま」などとよぶと、病魔が大切なものと感づくから、「ひろい」と呼び捨てにするようにという細心の注意である(豊田1988)。

逆に、「化け物問答」では、悪霊も、その本当の名前を当てると、霊力をうしない退散してしまう。

「山寺に旅人が泊ると、夜中に化け物が次々に出てくる。旅人が名をたずねると、『さいちくりんのけいさんぞく』『なんちのりぎょ』『ほくざんのびゃっこ』『とうざんのぼこつ』等の名をいう。旅人が、『西の竹藪の三足の鶏』『南の池の年経た鯉』『北の山の白狐』『東の山の馬捨て場の骨』などと解きあかすと、化け物は退散する。」(川田1988, P18)

これは、川田(1988)が解釈するように、化け物のもつ謎めいた呪文のような固有名詞を、普通名詞として意味に分解することによって、化け物とその謎めいたアイデンティティをたもてなくし、霊力をうしなわせるというはなしである。悪霊にかぎらず、聖なる霊の呪文もふくめて、ユダヤ教における「アブダカダブラ」とか、真言の「アピラウンケン」, 「アアーアンクアーク」などの呼び名の霊力は、その名前が、社会の意味の分類体系のなかにはいらず、社会秩序の外部からきたものだという、不可思議で荒々しい発音の印象によっているのだろう。「チチンパイイ」などは、真言などにくらべるともうすこし日常世界の秩序にちかい呪文である。日常の言葉とはことなる疑似言語音による霊との会話である、舌語り(glossolalia)も、日常的な言語的、社会的秩序の枠の外からの発話だという音声的印象によるところがおおきい(Jakobson, R, and Waugh, L 1979)。

清水義範(1996)に「名前がいっぱい」という、子どもの名づけや、あだな、ペンネーム、戒名、動植物の学名、などなどをめぐる悲喜劇をえがいた作品がある。ほかに、製品名、会社や店の名前、品種の名前、競走馬やペットの名前、雑誌名、本のタイトル、現象の名前、など、われわれの社会生活には、名前があふれている。ここでは述べなかったが、差別語の問題もある。名前はたんなる言葉のラベルだが、人間の認識は言葉におおきく依存しているので、たんなる名前によって、物事の認識がえられ、かたより、悲劇がおきたり、損得がうごいたり、などの重大な結果をもたらさう。

以上、概略をスケッチしたが、名づけは、人間・社会科学的にみて、ややこしいところのある興味深い現象のようである。

地名や苗字については、古くから文字化された資料があることもあって、古い時代の言葉や歴史を調査した詳細な研究がなされている(丹羽1994, 鏡味1984)。地名と人名は、普通名詞にたいする固有名詞であり、欧米では、固有名詞が文法的範疇として普通名詞から区別されていることもあって(固有名詞には冠詞がつかず、大文字ではじめるなど)、Onomastics(固有名詞学)として、言語学的、歴史的研究がなされている。日本では、地名研究と苗字研究が別個に研究され、固有名詞学としてまとめてあつかわれることがないが(鏡味1982)、欧米では、固有名詞学はずいぶん和由緒のある学問らしい(田中1996)。

地名や苗字の領域をはずれると名づけの学術的研究は極端にすくなくなる。苗字のあとにくる人名については、赤ちゃんの名づけについての実用書(たとえば佐久間1999など)は山ほどあるが、学術的研究はすくない(寿岳1979, 森岡・山口1985)。商品のネーミングにかんしては、実践家による本はたくさんでている(岩永1998, 1999, 横井1997, 松島1997)が、学術的研究は森岡・山口(1985)くらいしかみあたらない。言語学では、名づけとかかわるのは、語彙論である。語彙論における語構成の研究は、名づけを理解するうえで不可欠の知識である(玉村1990, 玉村1996)。しかし、音韻論や統語論などにくらべると、語彙の問題は言葉の外の世界とのかかわりがつよいので、言語学に伝統的な言葉を自律的なシステムととらえる方法では、あつかいにくい側面がおおきい。とくに名づけの研究は、すでに存在する言葉の秩序構造の解明だけにとどまらず、社会的心理的な意味の力学のかかわる生成現象の解明なので、言語学の守備範囲の内には、すんなりとは、はいらない(西尾1988)。名前のもつ社会・心理的な意味や機能については、文化人類学でつっこんだ興味ふかい研究がなされているが、対象となるのは、文字をもたない民族における、人名呼称や動植物の民俗分類名などが中心である(レヴィ・ストロース1976, 松井1982, 川田1988)。

心理学では、カテゴリー化の研究は進展しているが(今井1996)、名前の心理についてはピアジェやウェルナーの古典的研究の段階にとどまっているようである。

森岡(1977)は、国語学の立場から篤実にまとめた、充実した命名論の最後をつぎのようにしめくくっている。「命名の問題は、一般意味論・論理学・言語学・社会心理学・民俗学など、その関連する領域がすこぶる広い。本稿では、日本語における名の語構成と名づけの心理に焦点を合わせたが、稿を終わって、しかも紙数を相当に越えながらも、何か言いたりないもどかしさを感じる。命名論という学を、改めて構築する必要がある次第である。」(森岡1977, P247)

本論文のタイトルは「名づけの認知科学」である。これは、名づけを人間と社会にかかわる現象として総合的にとらえるための枠組みが、まだないようだから、そのための材料をあつめてみようという、素朴なこころみである。材料をあつめ枠組みを検討しようとする領域が、認知科学といわれている範囲におおよそは入りそうなので、とりあえず「名づけの認知科学」と名づけておく。認知科学は、言語学、心理学、人類学、哲学、計算科学、神経科学など、学問分野のかきねをこえて、人間の認知にアプローチしようとする学際的な研究領域の総称である(ガードナー1987)。計算論的アプローチが主流となってきたが、80年代後半以降、状況論や認知意味論など、さまざまな方向での研究が提唱されるようになってきた。「名づけの認知科学」は、言語学、心理学、人類学、哲学における諸研究を中心に参照するが、計算科学と神経科学との関連はややよくなる。

本論文では、何回かにわたって、名づけの理論のスケッチと、商品のネーミング、人の名前(本名、あだ名、戒名など)、場所の名前、学術用語の名前、感性と名づけ、語彙の相と印象、など具体的事例の検討と調査結果を、報告していく。今回は、語彙の体系と語の意味について、名づけとの関連で、基本的な知識を紹介し、若干の検討をくわえる。

1. 語彙の体系と名づけ

1.1 人工的な言語デザイン

名づけの現象は、ある対象なり出来事にそれまでなかった、新しい言葉のラベルを発案し、使用していくことである。名づけ現象の中心は自然発生的なものだが、周辺的には人工的な言語デザインがある。

たとえば、日本語の「または」が、論理学の排他的 OR の意味なので、論理学の OR の

意味をあらわす接続詞、「または」を考案するとする。こうすれば、「レポートまたは講義の感想を提出すること。両方を提出してもよい。」というかわりに「レポートまたは講義の感想を提出すること。」と簡潔に表現できる。しかし、こういう身体・社会的な基盤をもたない論理にかたよった名づけは、自然発生的な名づけの現象ではなく、論理的な人工言語デザインに類するものである (ロッシ1984)。

論理的な人工言語デザインとしてもっとも有名な、17世紀イギリスの学者ウィルキンスによる万物の命名法について、ホルヘスの解説 (ホルヘス1982) をきいてみよう。

「ウィルキンスは宇宙を40のカテゴリーないし「類」に分けるが、「類」は「差」に、「差」はさらに「種」に分かたれる。おのおの「類」には、二文字の単音節語がわりあてられ、おのおの「差」には子音、おのおの「種」には母音があてられる。こうして、たとえば de は四大を、deb は四大の最初である火を、deba は火の一部をなす炎を意味する。……「鮭」なる語は、その指示する物体については何も教えてくれない。それに照応する zana は(40のカテゴリーとそれらのカテゴリーの分類に通暁した者には)、朱みがかった肉をもつ有鱗淡水魚であることを定義している。」(ホルヘス1982, PP155-157)

論理的な人工言語計画がなぜうまくいかないのか、ホルヘスの診断は簡潔、明快である。

「ウィルキンス、無名 (または非公認) の中国の百科辞書編纂者、ブリュッセル書誌学会、それぞれに見られる恣意性についてわたしは述べた。明らかに、宇宙の分類で恣意と憶測に基づかないものは一つとしてない。その理由はきわめて簡単で、われわれは宇宙が何であるかを知らないからである。」(ホルヘス1982, PP156-157)

名づけの対象となりうる、宇宙の事物や出来事をあらかじめ限定しておけないので、属性の集合を用意しておいて、その組み合わせで、一挙に名前を用意するようなことはできないのである。自然言語における名前は、言語集団の歴史をへて蓄積されていくものであり、ひとりの人間にデザインできるようなものではない。梅棹 (1983) がいうように、人工的な言語や書記法の確立というのは、ひとの不思議な情熱をさそうものらしい。人工的な言語や書記法の発案者には、私財をなげうってといったファナティックなひとが多い。これは、言葉や書記法の確立は、言語共同体を定義するようなことになるからだろう。

1.2 辞書とシソーラス

合理的に言葉をデザインするというような、だいそれたまねではなく、歴史的に蓄積されてきた自然言語の単語群を合理的に整理することなら、膨大な作業になるとしても可能

である。これが、辞書やシソーラスの編纂である。

辞書は、各単語について、綴り、発音、アクセント、品詞、定義、文例、派生語、同意語、類義語、反意語、語源、必要におうじて図解などもしめたものを、綴りの順に編集したものである。辞書の項目数は、膨大な数にのぼる。たとえば、広辞苑の4版は、約22万語を収録している。

辞書は、単語を綴りと品詞によって分類するだけだが、シソーラスは、語の意味に着目して、単語を分類したものである。英語のシソーラスの代表は、1852年に初版がでた Roget の Thesaurus で、図書や論文の分類などにもちいられている。宮島 (1977) はロジェのシソーラスをこう評している。「英語のもので、ひろくつかわれているロジェーの「シソーラス」は、ふるいせいもあり、論理主義的であって、体系がわかりにくい。その大分類は、(1)抽象関係、(2)空間、(3)物体、(4)知能、(5)意志、(6)感情・道徳であり、「自転車」が「空間」に、「鉛筆」が「知能」に、「鉄砲」が「意志」に属する、という奇妙な結果になっている。これらは「分類語彙表」ではみな「生産物および用具」に属している。」ウィルキンスの分析的言語が1664年で、西欧で論理的人工言語デザインがさかんだったのが、17世紀から18世紀だから、論理的人工言語デザインの影響があったのだろう。日本語の代表的なシソーラスとしては、1964年に国語研究所からだされた「分類語彙表」がある（国立国語研究所1964）。上の引用文で、宮島 (1977) が「分類語彙表」といっているのが、国立国語研究所によるシソーラスである。「分類語彙表」では、約32000語の単語を、四種の品詞×六種の内容的大分類によって分類整理している。「分類語彙表」については、あとで、もうすこし具体的に説明する。

大野 (1999) によると、昭和30年代の調査では、日本の高校上級生の平均の語彙数は約3万だった。大野は、今の大学生の平均の語彙数は、読書量がいちじるしくおちているので、2万か1万5千になっているのではないかと危惧している。1年間に新聞や本でつかわれる単語は約3万なので、2万程度の語彙数では、2万から3万までの語彙は使用頻度がしだいにすくなくなるとはいえ、新聞や本を自由によみこなすにはやや不足である。直接にその単語をしらないということはなくとも、派生語や関連語の情報がすくないとしいている単語の理解も浅くなる。一方、日常生活に必要な、基本語は、せいぜい3千語である。ごくおおざっぱにいうと、日常生活に必要な3千語、一般的な読み書きに必要な3万語、言語共同体のストックとしての30万語、といったところがめやすとしていえる。

辞書とシソーラスにおける単語の内容のあつかいがどんなものか、すこし具体的にみて

おこう。辞書については、広辞苑4版を、シソーラスについては、「分類語彙表」をつかう。

辞書で「ばら」をひくと下にしめすような説明がでてくる。語義は、ふたつで、ひとつは和語の「いばら」と同義語 (synonym) で、有刺鉄線をさす「茨線」はこの語義からの複合語である。二番目の語義が、花の咲く薔薇で、「しょうび」、「そうび」、「ローズ」は、この同義語である。文例はなく語義の説明が長々とされている。説明のしかたは、「ばら」が「バラ属」、「観葉植物」、「落葉低木」に属することがいわれている。これらは、「ばら」の上位語 (hypernym) であり、「ばら」がこれらの上位語のメンバーであることをいっている。つぎに、「ばら」は「つるばら」と「木ばら」にわかれることがいわれている。これらは「ばら」の下位語 (hyponym) であり、これらが「ばら」のメンバーであることをいっている。説明はつぎにこまかくなって、「ばら」の「花」の「形」が「基本型では萼片・花弁は各五」で「大輪・小輪、一重咲・八重咲、剣咲き・平咲きなど」の種類があり、「花」の「色」が「深紅・黄・白」、「花」の「匂におい」が「香りたかいこと」、「葉」が「有柄、托葉があり、羽状複葉ある」こと、などを説明している。これらは、「ばら」の部分名 (meronym) が、どんな属性グループに属するか指定である。「北半球の温帯を中心に約二百種が分布。」は百科事典的記述である。《季・夏》は俳句の夏の季語であることをしめしている。

以上のようにみていくと、辞書における語義の説明が、基本としては、同義語 (英語では類義語も同義語も Synonym である。類義語も同義語との区別の問題は、日本語の語彙の相のところで論ずる)、上位語、下位語、部分名によっていることがわかる。

「ばら【薔薇】

①「いばら (茨)」に同じ。

②バラ属の観賞用植物の総称。いくつかの原種が東西で古くから観賞されてきたが、一九世紀以後に莫大な数の品種が作られ、世界中で栽培される。つるばらと木ばらに分けられ、花の形は大輪・小輪、一重咲・八重咲、剣咲き・平咲きなど、花色は深紅・黄・白、また四季咲、小形のミニチュア-ローズなど極めて多彩。花の王と言われる。香料用にも栽培。また、バラ科バラ属の落葉低木の総称。高さ一〜二メートル。葉は有柄、托葉があり、羽状複葉。花は高い香りを持ち、基本型では萼片・花弁は各五。北半球の温帯を中心に約二百種が分布。しょうび。そうび。ローズ。 《季・夏》

「ばら【荆棘】

とげのある木の総称。いばら。」

「ばら」には、関連したふたつの、単語があるので、以下にしめす。ひとつは、「ローズ」で「薔薇色」という色と、ダイヤモンドのカットの語義を、別にもっている。もうひとつは、「ロゼ」で、ワインの一種である。

「ローズ【rose】

- ①薔薇（バラ）。また、その花。
- ②薔薇色。淡紅色。
- ③二四面にカットしたダイヤモンドの称。」

「ロゼ【rose フランス】

（淡紅色の意）淡紅色の葡萄酒。赤葡萄酒の発酵の途中、淡紅色に色付いたところで果皮を除いて製する。ロゼ-ワイン。」

辞書では「ばら」のような、具体的な対象をさす単語や複雑な単語の説明は充実しているが、「右」とか「左」といったあまりにも基本的な単語の説明はむづかしい。それぞれ、複数の派生的な語義があるが、身体を中心とした空間定位にかんする説明のみぬきだしてみる。

「みぎ【右】

（ニギリ（握り）の転か）

- ①南を向いた時、西にあたる方。⇔左。」

「ひだり【左】

- ①（端・へりの意のハタ・ヘタが転じた語か）南を向いたとき、東にあたる方。記上「汝（イマシ）は右より廻り逢へ、我は一より廻り逢はむ」⇔右。」

「右」と「左」の定義には、それぞれが反対語（Antonym）であることが付記されている。また、「方」という上位語に属することもしめされている。しかし、上位語の規定が十分ではなく、下位語や部分名は存在しないので、語義は明確になっていない。反対語による定義だけでは、「右」をひいたら「左」とは逆の方向、「左」をひいたら「右」のとは逆の方向といった、直接の循環的定義になってしまう。広辞苑は、さすがに、直接の循環的定義はせず、「南」といった地理的方位をもちいた定義をしている。

「みなみ【南】

- ①四方の一。日の出る方に向かって右の方向。みんなみ。⇔北。」

しかし、うえにしめした「南」の説明をみると、「右」をつかっているのが、間接的な循環的定義になっている。「右」、「左」、「南」などの定義には、上位語として、「方」だけで

はなく、「地球中心の方向」,「身体中心の方向」といった、中間的な上位語を導入する必要があるだろう。また、「人間の多数の利き手」,「植物のツルの巻き方」,「有機化合物の異性体」などの百科辞典的補足も必要かもしれない。辞書は、言葉の概念構造をあきらかにしめすというより、知らない言葉の説明が目的なので、日常生活で暗黙のうちに十分理解されている単語について、そんなにくわしく説明できないということかもしれないが。

以上みてきたように、辞書における語の意味の説明は、同意語、類義語、反対語、上位語、下位語、部分名、全体名 (Holonym 部分名の逆で、「花卉」の全体名が「花」などである。) など、語と語の関係を中心に行っている。

辞書が関連する言葉の群による言葉の説明だとすると、シソーラスは言葉を内容的に分類整理したものである。

図1に「分類語彙表」における単語の分類基準と、分類された単語数をしめした (中野1998)。

	体	用	相	その他	合計
抽象的關係	6641	2139	2192	99	11071
人間活動の主体	3183				3183
人間活動 精神および行為	9804	2188	1774	263	14029
生産物および用具	3217				3217
自然および自然現象	3642	474	647		4763
計	26487	4801	4613	362	36263

図1 分類語彙表における単語の分類基準と単語数

品詞の分類で、体は体言で名詞、用は用言のうちの動詞、相は形容詞、形容動詞、副詞、連体詞、その他は接続詞、間投詞である。「分類語彙表」にふくまれるのは、自立語のみで、付属語の助詞や助動詞はふくまれていない。形容詞と形容動詞は、ものごとがある性質をもつことや、ある状態にあることをのべる語である。両者のちがいは、活用形のみである。「美しい」,「辛い」,「小さい」など終止形が「い」となるのが形容詞で、「静かだ」,「立派だ」,「健康だ」など終止形が「だ」となるのが形容動詞である。両者とも、それだけで、「とうがらしは辛い」,「山は静かだ」などと述語になれる。ただし、形容動詞のほうは、「静か」,「立派」,「健康」などと語幹のみを単独でもちいることができるのにたいし、形容詞は「美し」,「辛」,「小」などと語幹のみを単独でもちいることはできない。金田一(1988)は、形容動詞を、語幹+助動詞的接尾辞に分解できるので、分析型の形容詞、形

容詞を統合型の形容詞とよんでいる。連体詞は、「この」、「こういう」、「ある」、「いわゆる」など、形容詞や形容動詞と同様に、体言を修飾するが、述語にならない言葉のちいさなグループである。副詞には、修飾副詞と予告副詞とがある。修飾副詞は、「しずしず」など情態、「とても」など程度、「たっぷり」など分量、「しばしば」など頻度を、あらかず副詞である。予告副詞は、「決して」や「おそらく」など、文頭にあらわれて文末の述部の表現を予告する副詞である。擬音語や擬態語などは、修飾副詞である。相に分類されるのは、以上のような、性質や状態をあらわす単語群である。分類語彙表における単語の品詞分類は、単語のさししめす意味内容に着目した、おおづかみのものであるといえる。

内容の大分類は、単語数からもうかがえるように、「生産物および用具」、「自然および自然現象」、「人間活動の主体」は、適当なサイズだが、のこりのふたつは、分類枠がやや大きすぎるようである。分類語彙表の分類は、品詞のほうは、おおづかみで適当だが、内容のほうは、大分類から小分類へいきよになってしまうので、もうすこし、中間的な分類枠を充実する必要があるようにおもえる。

具体的に分類語彙表がどうなっているかをしめすために、前にあげた「ばら」と「左」、「右」のふくまれている項目の例をあげる。

〔1. 体の類

1.5. 自然物および自然現象

1.551. 植物名

.....

ばら, ローズ, いばら, うめ, こうばい, あおうめ, もも, すもも, すいみつ, さくら, ひがんざ くら, やえざくら, やまざくら, はざくら, いちご, やまぶき, びわ, りんご, なし, あじさい]

.....]

なし, あじさい」のあとの」は、科の区切りである。

〔1. 体の類

1.1. 抽象的關係

1.1740 左右

左右(きゆう), 左右(みぎひだり), 左(ひだり), 左(さ), 右(う)

左側 (ひだりがわ, さそく), 右側 (みぎがわ), 左岸, 右岸, 左翼, 右翼, 左手, 右手,
左方, 右方, 右舷, 左舷, ライト, レフト

前後 (1.76), 横 (1.77)」

前後, 横は, 他の項目の分類にもあらわれる。したがって, 全体としては, 純粋な階層構造ではなく, ごくわずかな重複所属をする語の部分もいれると, セミラティス構造を形成することになる。

1.3 WordNet における名詞語義の階層構造

WordNet は, 「The Magical Number Seven, Plus or Minus Two: Some Limits on Our Capacity for Processing Information」などの論文でしられた認知心理学者の G, A, Miller が, 1980年代に発案し, 90年代をつうじてプリンストン大学のグループを中心に開発されてきた英単語の電子データベースである。1999年現在では, version1.6がでており, インターネットをつうじて直接に単語を検索したり, 辞書とブラウザをダウンロードできる (<http://www.cogsci.princeton.edu/~wn/>)。WordNet は, 名詞, 動詞, 形容詞関係, 副詞関係の四つの部分からなっている。あつかわれている語彙数は, version1.5の同義語群 (Synsets) の数でいうと, 名詞が約60000, 動詞が約11500, 形容詞関係が約16428, 副詞関係が3242である (Fellbaum, C.1998)。品詞の分類は, 「分類語意表」とほぼ一致し, 名詞が体に, 動詞が用に, 形容詞と副詞が相に対応する。

WordNet の特徴は, 関係的語彙意味論 (Relational Lexical Semantics) の立場から, 各品詞を同義語群にわけ, 同義語群間の関係を明示的に表示して, 語彙を組織化する点にある。あつかうのは単語の語義のみで, 発音や綴り, 語源, 百科事典的情報などは, あつかわない。この点で, WordNet は辞書というより, シソーラスにちかいが, シソーラスが単語を分類し, 階層関係などは分類表のなかに暗黙にしめされたのにたいし, WordNet では階層関係は上位語, 下位語の関係として明示的にしめされる。以下, 前節で広辞苑の記述をみた, 「ばら」に対応する「rose」について, WordNet の記述をみてみよう。

「rose」の語義は三つの同義語群からなる。

「The noun “rose” has 3 senses in WordNet.

1. rose—(any of many plants of the genus *Rosa*)
2. blush wine, pink wine, rose, rose wine—(pinkish table wine from red grapes whose skins were removed after fermentation began)

3. rose—(a dusty pink color)』

1. が植物のばらである。かつこのなかは、辞書的につかえるようにした解説である。2. はワインである。blush wine, pink wine, rose, rose wine は、同義語群である。3. は、色名である。

「rose」の上位語をみてみよう。

〔Sense 1

rose—(any of many plants of the genus Rosa)

⇒ shrub, bush—(a low woody perennial plant usually having several major branches)

⇒ woody plant, ligneous plant

(a plant having hard lignified tissues or woody parts especially stems)

⇒ vascular plant, tracheophyte

(green plant having a vascular system: ferns, gymnosperms, angiosperms)

⇒ plant, flora, plant life—(a living organism lacking the power of locomotion)

⇒ life form, organism, being, living thing—(any living entity)

⇒ entity, something—(anything having existence (living or nonliving))

rose ⇒ 灌木 ⇒ 木本 ⇒ 維管束植物 ⇒ 植物 ⇒ 生物 ⇒ 存在物 と階層があがっていく。存在物が最終階層である。

〔Sense 2

blush wine, pink wine, rose, rose wine

(pinkish table wine from red grapes whose skins were removed after fermentation began) ⇒ wine, vino—(fermented juice (of grapes especially))

⇒ alcohol, alcoholic beverage, drink, intoxicant, inebriant

(a liquor or brew containing alcohol as the active agent; "alcohol

(or drink) ruined him")

⇒ beverage, drink, drinkable, potable

(any liquid suitable for drinking: "may I take your beverage order?")

⇒ food, nutrient (any substance that can be metabolized by an organism to give energy and build tissue)

⇒ substance, matter

(that which has mass and occupies space; "an atom is

the smallest indivisible unit of matter”)

⇒ object, physical object

(a physical (tangible and visible) entity;

“it was full of rackets, balls and other objects”)

⇒ entity, something (anything having existence (living or nonliving))」

アルコール飲料としての rose は、rose ⇒ ワイン ⇒ アルコール ⇒ 飲料 ⇒ 食物 ⇒ 物質 ⇒ 対象物 ⇒ 存在物 と階層をあがっている。ここでも、存在物が最終段階である。アルコール飲料としての rose には、あとふたつの系列の階層がたどれる。煩雑になるので、() のなかの解説は省略してしめす。

〔rose ⇒ liquid ⇒ fluid ⇒ substance, matter ⇒ object, physical object ⇒ entity, something〕

〔rose ⇒ drug of abuse, street drug ⇒ drug ⇒ artifact, artefact ⇒ object, physical object ⇒ entity, something〕

アルコール飲料としての rose には、アルコールとしての、液体としての、嗜癖物としての、三種類の階層系列がたどれることになる。G, A, Miller (1998) は、Wordnet の名詞で、このような複数の上位語に属する同義語群はすくないといっている。しかし、複数の上位語に属するケースがあると、純粹な階層構造ではなく、セミラティスの構造になる。また、G, A, Miller (1998) は、循環的な階層関係もまればだが、存在するといっている。そうすると厳密に言えば、Wordnet の名詞は、ネットワーク構造になる。しかし、全体とし

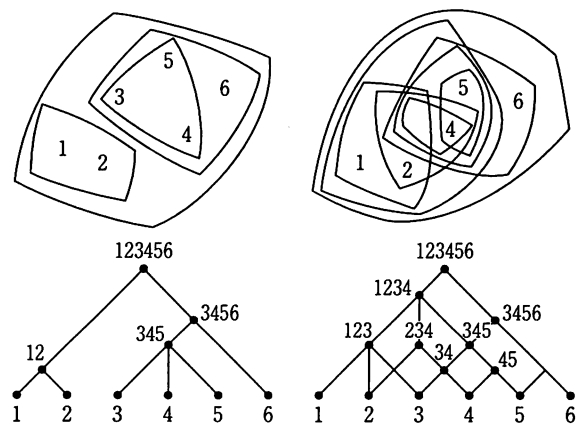


図2 階層 (左) とセミラティス (右)

ては、Wordnet の名詞は階層的に位置づけられている。図2に階層とセミラティスの概略図をしめす。

[Sense 3

rose—(a dusty pink color)

⇒ pink—(a light shade of red)

⇒ chromatic color, chromatic colour, spectral color, spectral colour

(a color that has hue)

⇒ color, colour, coloring, colouring

(a visual attribute of things that results from the light they emit

or transmit or reflect; “white is the coolest summer color”)

⇒ visual property—(an attribute of vision)

⇒ property (a basic or essential attribute shared by all members of a class;

“a study of the physical properties of atomic particles”)

⇒ attribute

(an abstraction belonging to or characteristic of an entity)

⇒ abstraction (a general concept formed by extracting common features from specific examples)]

色名としての rose は、「rose ⇒ ピンク ⇒ 有彩色 ⇒ 色 ⇒ 視覚的性質 ⇒ 性質 ⇒ 属性 ⇒ 抽象」という系列をたどる。

以上、ややくわしく、WordNet における「rose」の上位語の構成をみてきた。

下位語をみると、語義1については11種類の群のバラの名前の群がしめされている。語義2については、下位語はしめされていない。語義3は、old rose という色名がしめされている。WordNet では、固有名詞はあつかわれませんが、11種類の群のバラの名前になると、固有名詞にちかくなっていく。以下に説明をはぶいて、11種類の群のバラの名前をしめす。

[(mountain rose, *Rosa pendulina*), (ground rose, *Rosa spithamaea*), (banksia rose, *Rosa banksia*), (dog rose, *Rosa canina*), (China rose, Bengal rose, *Rosa chinensis*), (damask rose, summer damask rose, *Rosa damascena*), (sweetbrier, sweetbriar, briar, briar, eglantine, *Rosa eglanteria*), (Cherokee rose, *Rosa laevigata*), (multiflora, multiflora rose, Japanese rose, baby rose, *Rosa multiflora*), (musk rose, *Rosa mos-*

chat), (tea rose, Rosa odorata)」

「rose」の上位語は、語義1の植物名と語義2のワインが存在物、語義3の色名が抽象まで、それぞれ階層をさかのぼることができる。存在物と抽象には、下位語は存在するが、上位語は存在しない。このような語義を、Unique Beginner という。WordNet の名詞には、11の Unique Beginner が存在する。6万の名詞の同義語群は、すべて11の Unique Beginner からの下位語として位置づけられることになる。図3に、WordNet の名詞の11の



図3 WordNet の名詞の Unique Beginner

Unique Beginner と、そこからの19の下位語をしめした。これは、英語名詞の語義を階層的に整理することによってえられた、ある種の存在論 (Ontology) である。

1.4 WordNet の評価

WordNet は、心理学の実験室における概念的カテゴリーのモデルを、数十の語彙からなるミニチュアの世界をこえて、実際の辞書やシソーラスがあつまっている数万の世界に拡張して、かなりの成功をおさめた例である。成功のポイントは、単語の語義を、単語間の上位語、下位語の関係のみによって規定し、それを古典的な階層におさめたことである。物理的な包含、隣接関係にかかわる部分名、全体名についても、WordNet は情報をもりこんでいるが、部分-全体関係には、「家」の部分名である「ドア」と、「ドア」の部分名の「取っ手」では関係がことなるため、推移関係がなりたたないなど、まだあつかいがむづかしいところがのこっている (Fellbaum, C. 1998)。上位語、下位語については、「ばら」が「植物」なら、「植物」のもつ属性は、すべて「ばら」にも継承され、「ばら」には「植物」にない属性がくわわる。また、上位語にとっての下位語は、下位語にとっての上位語になる。古典的カテゴリー論では、ウィルキンスのころみのように、語義を形成する属性をすべて列挙し、意味の原子にあたる意味素をもとめようとしたが、かぎられたせまい領域にしか適用できず、広い世界に適用しようとするとなんセンスになるようなモデルしか提供できなかった。WordNet は、既存の単語の関係のみを問題にしたので、意味素などといった原子をでっちあげる必要をまぬがれることができた。

WordNet の階層構造の出発点は、コリンズとキリアンによる意味記憶における概念的階層構造のモデルである (Collins and Quillian 1969)。これは、実験室のモデルで、対象となる単語は、せいぜい数十である。図4に、コリンズとキリアンが実験の対象とした、動物、ほ乳類、鳥類、魚類にかんするカテゴリーとカテゴリー間の階層関係、各カテゴリーの属性をしめす。

コリンズとキリアンは、被験者に「カナリアはカナリアである」(0)、「カナリアは鳥である」(1)、「カナリアは動物である」(2)、「カナリアは魚である」(偽)などのカテゴリー判断、「カナリアはさえずることができる」(0)、「カナリアは翼をもつ」(1)、「カナリアは皮膚をもつ」(2)、「カナリアはえらをもつ」(偽)などの特性判断の課題をだし、回答までの反応時間を測定した。()のなかの数字は、概念の階層構造において、「カナリア」から、各対象となるカテゴリーや、そこでの属性までに到達するのに経由する必要な、上位カテ

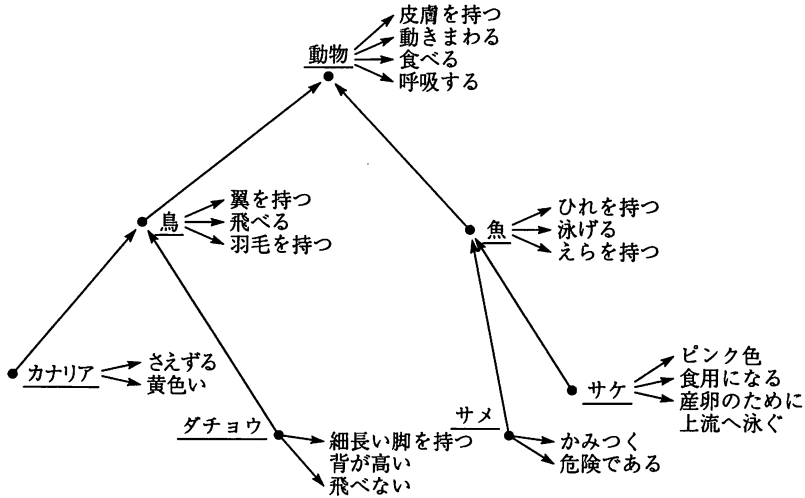


図4 動物にかんするコリンズとキリアンの階層構造の一部

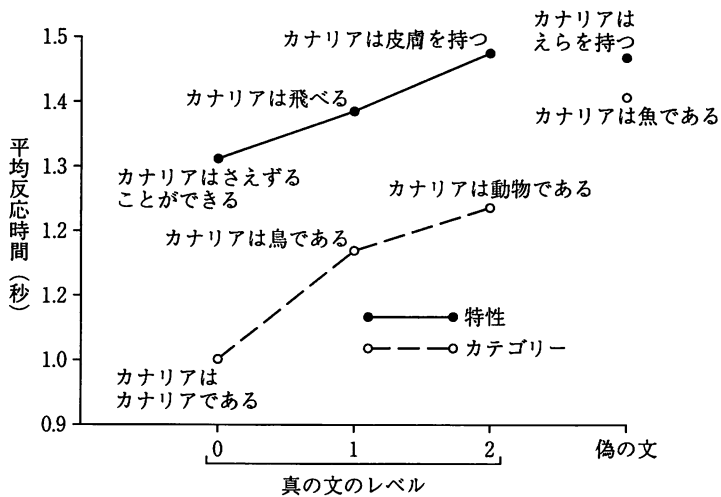


図5 ことなるタイプの文についての平均反応時間

ゴリー・下位カテゴリー間の関係の数である。実験結果を、図5にしめす。

結果は、明白で、人間の動物にかんする意味記憶の構造が、階層的構造をしており、階層間で属性の継承がおこなわれるといった経済的なしくみによっていることをしめしている。

コリンズとキリアンの階層モデルは、1970年代には、認知心理学における自然概念研究の代表例とみなされてきた (ロス・フリスビー1989)。しかし、1980年代にはいと、コリ

ンズとキリアンの階層モデルは、妥当性をかくふるい古典的なカテゴリー論として、心理学者からは、みなされるようになった。これは、ひとつには、属性を基本とした階層モデルは数十の語のカテゴリーを対象とする実験室のミニチュアレベルをなかなか脱せず、意味素などにかんする議論がどろぬまの様相をていしたからである。こんななかで、ロッシュらによって、典型性効果やカテゴリーの基本レベル、家族的類似性など、コリンズとキリアンの古典的階層モデルと矛盾したり、あつかえないような事実をしめす研究が報告され、研究者の興味は、認知言語学と総称される方向にシフトした（テイラー1996、ウンゲラー・シュミット1998）。以下、ごく簡単に典型性効果、カテゴリーの基本レベル、家族的類似性について、説明しておく。

典型性効果というのは、コリンズとキリアンの階層モデルでは、おなじレベルのカテゴリーは、上位のカテゴリーから共通に属性を継承するので（ただし、「ダチョウ」などは「鳥」だがとべないので、飛べるという属性はもたないという、継承される属性の一部とりけしというあつかいが必要になる。）、カテゴリーのメンバーとしては同等であると予測されるが、実際は、典型的なメンバーとそうでない周辺的なメンバーが存在することが判明したのである。たとえば、「スズメ」も「サギ」も「鳥」という上位カテゴリーのメンバーだが、「スズメ」のほうが「鳥」の例としては典型的であり、カテゴリー判断や属性判断でも、反応時間がはやいという結果が示された。「家具」や「野菜」などさまざまなカテゴリーについて、典型性の評定データがとられたが、人々の判断はかなり一致して、カテゴリーにはそのメンバーとして、典型的なものと同期的なものがあることがしめされた。

WordNetの語義の階層には、Unique Beginnerがあるが、中心となるレベルはない。これにたいし、ロッシュらは、基礎的なカテゴリーレベルが存在することを指摘した。たとえば、「犬」の上位語をさかのぼると、「動物」、「存在物」などとなり、下位語をたどると「チワワ」とか「ダックスフンド」「柴犬」などとなる。これらの属性を列挙させる調査をすると、「犬」の場合が、もっとも多く、被験者間で共通の属性があげられ、上位の抽象的なカテゴリーは、あげられる属性がまちまちですくないし、下位の特定の対象をさすカテゴリーでも、あげられる属性がすくなくなる。これをカテゴリーの基礎レベルという。カテゴリーの基礎レベルは、対象への適用や、イメージの形成などの、語義と他の認知系との相互作用を係留するうえで重要である。これにたいし、より上位の抽象的なレベルは語義間の関係だけの側面がつよい。

また、カテゴリーの境界も、古典的カテゴリー論が想定したように、属性の所有の有無

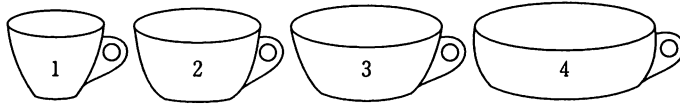


図6 「カップ」か? 容器の4枚の絵

で一義的にきめられるようなものではない。たとえば、「カップ」という名称をどんな対象に適用することができるか。図6に、レイボフが実験でもちいた、絵の最初の4枚をしめす (Labov 1973)。

被験者に、四つの文脈条件で、図6に示した容器をどうよぶかの判断をもとめる。判断には四つの条件がある。中立的条件は、だれかの手に握られているところを想像しての判断である。コーヒー条件は、誰かが手にもってコーヒーを飲んでいるところを想像しての判断である。食べ物条件は、マッシュポテトがいっぱいはいっていて食卓のうえにおかれているところ想像しての判断である。花条件は、切り花でいっぱいになって棚におかれているところを想像しての判断である。結果を、図7にしめす。結果は、カテゴリーの適用境界が、文脈におうじた可変的なものであることをしめしている。

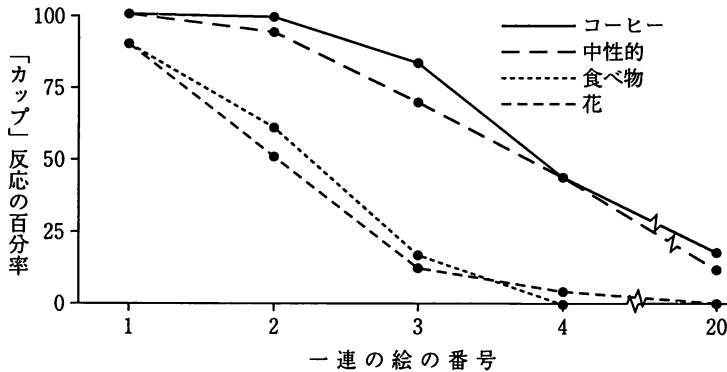


図7 四つのことになった文脈条件における「カップ」判断の百分率

古典的カテゴリー論への、もっともよくしられた異議もうしたてが、ウィトゲンシュタインによる家族的類似性によるカテゴリーの存在の指摘である (ウィトゲンシュタイン 1976)。家族的類似性というのは、家族の成員は、それぞれたがいにどこか共通の属性をもっていて、そうした様々な共通の属性の連鎖でひとつのカテゴリーを形成しているが、全員に共通の属性はないという指摘である。家族的類似性は、非常に有名で、古典的カテゴリー論へののはやい時期の批判としては重要である。しかし、家族の例は、あまりよくない

ようにおもえる。たとえば、「ウィトゲンシュタイン家のメンバー」の共通特徴として、ウィトゲンシュタイン家のメンバーに属し、社会からそうあつかわれること（これはたんなる言語上だけの事実ではない）があげられるのではないだろうか。この共通性の枠をのぞいたら、類似性の連鎖のちからだけでは、ウィトゲンシュタイン家のメンバーをむすびつけられないのではないだろうか。おなじ枠のなかにはいったメンバーを、むすびつけたら、種々の類似性の連鎖になるだけのことのようにおもえる。

家族的類似性によるカテゴリーは、レイコフ（1993）が名づけたように、放射的カテゴリー（Radial Category）といったほうがよいだろう。レイコフは、日本語における「本」を例にあげている。「本」は、一般には、長くて細いもの、棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、毛、手、脚などをかぞえるのにもちいる。しかし、それにとどまらず、ホームラン、バレーのサーブ、巻いてあるテープ、電話、手紙、テレビ番組、映画、注射、お座敷なども、一本とか二本と、かぞえる。ホームラン、バレーのサーブは、打球の軌道の形状に着目したものだろう。テープは、のばせば、細長いからだろうか。電話や手紙は、コミュニケーション経路の形状を想定したものだろうか。テレビ番組や映画となると、フィルムの形状がもとなのか、電話や手紙とおなじグループに属しているので、細長い形状というもとの意味とは関係なく本を適用したのか、はっきりしない。お座敷を一本とかぞえるのは線香が燃えつきるまでの時間からきたらしい。ここで生じているのは、細長い形というもとの意味が、隠喩的に軌道の形状やコミュニケーション経路の形状にも拡張され、さらに提喩的におなじ本を適用される他のグループにも適用されるという現象である。もとの意味の領域から、隠喩、提喩・換喩によって、カテゴリーが放射状に拡張している。こうした放射的カテゴリーは、「本」だけのことでなく、かなり一般的にみられるカテゴリーのありかたである。

隠喩（Metaphor）、換喩（metonymy）、提喩（synecdoche）（三者をあわせて比喩とよぶことにする）は、転義法（trope）の代表的存在として、レトリックで重要な位置をしめる表現法である。隠喩は、「月見うどん」、「白雪姫」、「甘い生活」、「堅物」、「熱い議論」、「腹を割って話す」、「壁につきあたる」、「社会の歯車」など、ふたつの領域間の類似性の発見によるみたての表現法である。ここでの例では、うどんの卵を月に、白い肌を雪に、生活を味の甘さに、人柄を材質の堅さに、議論の激しさを温度の暑さに、率直さを腹のなかをさらける行為に、障害を壁に、社会のなかの位置を歯車に、それぞれみたてている。隠喩は、精神的で複雑な現象を、物理的感覚的な出来事によってみたてるのが普通である。

換喩は、「キツネうどん」、「赤シャツ」、「のれんをつぐ」、「ホワイトハウスの決定」、「東京は追加経済策を発表した」、「春雨やものがたり行く簞と笠」(蕪村)など、物理的な隣接関係にあるより目立つ別の対象による置き換えの表現である。ここでの例では、うどんの油揚げとキツネ(油揚げはキツネの好物だといわれている)、坊ちゃんの教頭といつもきている赤シャツ、店とのれん、アメリカ政府と政府がおかれているホワイトハウス、日本政府とその所在地である東京、簞をまとっている人と簞、笠をまとっている人と笠、がそれぞれ物理的隣接関係にある。提喩は、「親子ドンブリ」、「飲む・打つ・買う」、「空から白いものがふってくる」、「人はパンのみにて生きるにあらず」など、類によって種をあらわしたり、類によって種をあらわす表現である。ここの例では、鶏と卵を親子といった類によって、酒・バクチ・女道楽を飲む・打つ・買うの類によって、雪を白いものの類によって、食物をパンという種によって、それぞれ表現している。レイコフなどの認知言語学の研究者は、換喩と提喩を区別せず、ひとまとめに換喩としてあつかうことがおおい。上でのべた「本」を、細長い形状とは関係なしに、手紙や電話とおなじ類に属するものとしてテレビ番組や映画にも適用するのを、レイコフは換喩によるカテゴリーの拡張としているが、厳密に言えば、ひとまとめの情報媒体といった類を介した提喩によるカテゴリーの拡張である。レイコフはあげてないが、線香とお座敷が換喩である。ここでは、隠喩、提喩、換喩がどんなものかだけを確認して(野内1998)、隠喩と提喩と換喩の関係などについての議論と検討はまた稿をあらためておこなうことにする。

うえにのべた、カテゴリーの適用境界や典型性、比喩による意味の拡張を、「山」という言葉についてみてみよう。「山」は、高さ何メートル以上ならそうとよんでいいのか、「岡」とどう区別するのか、一義的な境界はない。砂場でつくった山も「山」である。対象の客観的屬性というより、人間のもつ典型的なイメージをプロトタイプとして、状況におうじて、「山」らしい山から、あんまり山らしくない「山」まで、「山」という名前をつける。また、「はなしには山がなくてはいけいない」とか「山場にさしかかった」などというときの「山」の意味は、もりあがりの場所という意味で、地形以外の現象に「山」という言葉を隠喩的に拡張、適用している。また、「山」という名前には、山のあるところにあった鉱山の意味もある。平地の鉱山にも山ということもあり、これは隣接関係にもとづく換喩による「山」という言葉の拡張である。「山師」、「山勘」、「山をはる」など、今日では、山や鉱山などとのつながりは意識されないが、山の立木の売買や鉱山の採掘事業などを営むひとの行動様式にたいする評価を、一般的に適用したものである。「山」は、特殊な例で

はない。自然言語におけるカテゴリーのおおくは対象への身体的かかわりを基盤にしたもので、適用境界が客観的に定義されていることはすくないし、たいていの言葉は、比喩による拡張によって、語義を拡張していく。人間がさまざまな対象に名前をつけていくのは、身体を基盤にした、比喩による語義の拡張によって可能になるのである。

認知言語学以前には、比喩は表現の飾りとして位置づけられた。認知言語学の重要な貢献は、比喩をたんなる表現の飾りではなく、言葉の意味作用の基本的なしくみとして位置づけたことである。うえにしめした「本」という放射的カテゴリーは、「本」を細長い物の数に適用するといったもとの意味を、比喩的に拡張して形成されたものである。こうした比喩的な拡張の基盤にあるものとして認知言語学が重視したのは、身体知覚図式を基盤にしたカテゴリーである。認知言語学では、「つめたい仕打ち」「怒りが爆発する」「結論にたつする」「困難をこえて」などの日常的な表現にも、身体的経験の領域から、心理的、抽象的領域への意味の比喩的拡張があるとした。認知言語学以前の言語学や古典的カテゴリー論では、言葉の意味を脱身体的な対象の特性の束として位置づけ、語義の体系を静止的にとらえ、比喩などによる語義の拡張を表現のかざりであり、意味の本質にはかかわらないとかがえた。認知言語学における言葉の意味のとらえかたは、身体的、生成的であり、古典的な意味のとらえかたは脱身体的、静止的である。

WordNetにおける意味のとらえかたは、古典的な特性の束としてのものだが、言葉を言葉との関係のみによって規定し、特性を明示的にあつかわないことによって、古典的な特性的意味論の破綻からまぬがれている。WordNetの名詞の語義は、対象知覚や指示対象への適用、心理的イメージといった、言語と身体、外の事物、社会などとの相互作用を上手に回避し、名詞の語義の骨格となる体系だけをつかまえるのに成功している。

WordNetは、心理学ではあまり興味をもたれていないが、計算言語学の領域では注目されている。これは、WordNetが心理学的におもしろい、身体や外の事物、社会との関係を捨象した、古典的な語義モデルだからだろう。計算言語学の領域では、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などのEuroWordNetの開発や、韓国語版のWordNet開発がおこなわれている。また、WordNetと日本語の電子データベースのEDRにおける概念体系との比較などもなされつつある(荻野, 小林1999)。EDRは、日本のコンピュータ関係の会社が共同で、解説している日本語電子データベースで、日本語シソーラスだけではなく、日英語の翻訳、文例集などをふくんだ、かなり大規模、かつ、高価なものであり、WordNetのように特定の言語理論にかたよることをさげ、データの集積と整理に重点をおいたプロジェ

クトである (<http://www.ijnet.or.jp/edr>)。各言語のオントロジーの定式化、多言語比較によるオントロジーの共通部分の確定、などがいわれているが、今後の展開が楽しみである。

WordNet は、認知言語学の批判にどうこたえるだろうか。G, A, Miller (1998) は、プロトタイプ効果はたしかに存在するが、語義の階層的構造も同様に心理学的なりアリエーがあり、両者は併存している現象だろうと述べている。また、カテゴリーの基本的レベルについては、Object を出発点とする語義にのみみられる現象で、「表情」とか「感情」などといった他の Unique Beginner を出発点とした語義についてはみられないのではないかと述べている。たしかに、ロッシュらによる基本的レベルの調査は、人工物や自然物などの、Object を調査対象としたものばかりである。ほかの、Unique Beginner を出発点とした系列にも、基本レベルがあるのか、調べてみる必要があるかもしれない。カテゴリーの基本的レベルの問題については、語形との関係でまたのべる。G, A, Miller はふれてないが、比喩による語義の拡張については、WordNet ではそれぞれを別の語義としてあつかってしまっている。

以上を要するに、WordNet は、身体とのインタフェースや語義の生成的側面を捨象し、語義の骨格のみを抽出したモデルである。特筆すべきは、簡単なモデルで自然言語の語義のほぼすべてを網羅したことである。モデルの単純さと網羅性は、今後の語義研究の土台として有益である。名づけは、その事物との相互作用や、言葉のイメージ、言葉がつかわれる社会的文脈、言葉の生成など、WordNet が捨象した要因とかかわる現象なので、WordNet が提供する語義は、名づけ現象を説明するうえでの、重要だが前提として把握すべき土台といったところである。WordNet におけるあつかいが、まださだまっていない名詞における部分名と全体名、形容詞、副詞などは、言葉のイメージや生成を理解するうえでの語義的な基礎となる部分があるので、言葉のイメージや生成の検討のところで、また、必要におうじて言及する。

1.5. 語彙の体系と言葉の意味

これまでの議論で、語義とか意味とか、おおざっぱにつかってきたので、言葉の意味について、とりあえずの整理をしてみよう。

「ねずみがすみにいるよ」

「なんだって、ああ、あれかい。ちいせいな。」

「いや、おおきいよ」

「ちいせえよ」

「いいや、おおきい」

するってえっと、ねずみがすみっこで、「ちゅう」

意味にかんする哲学の論文などでは、よく、A Cat is on the Mat などという例文がでてくる。Cat と Mat は韻をふんでいる。これを日本語に訳すのに、「ねこがマットのうえにいる」などと訳してもおもしろくない。それで、「ねずみがすみにいる」とした。ついでだから、志ん生の小話につなげて、整理するんじゃなくて、かきまわしてしまった。

「ねずみ」という音声パターンで、すみにいるねずみをさししめすのが外延指示である。ある言葉の外延は、ある言葉で、指示しうる対象の集合である。指さして環境内の対象を共同に注意しながら、特定の音声パターンをくりかえし発音すれば、一般的には、ある言葉の外延は共有できるが、つねに誤解はしょうじうる。たとえば、「カンガルー」という言葉は、オーストラリアのアボリジニの言葉では、「お前、何をいつてるんだい」といった意味らしい。オーストラリアへ植民した人が、アボリジニに、カンガルーをゆびさして、英語で「あれを、なんというかときいた」。しかし、アボリジニは英語がわからないから「カンガルー」とこたえた。それ以来、オーストラリアのぴょんぴょんはねる動物は「カンガルー」とよばれるようになった（ハッキング1989）。また、色について徹夜で議論したが、くいちがいが解消しなかった三人の大学生が、心理学の先生に誰がただしいのか、きめてもらいにいったら、三人ともちがうタイプの色盲だったというはなしをきいたことがある。また、わたしは、子どもの頃、バスにのって町に行くとき、乗車券をおだしてくださいといわれて、いつも10円玉をだしたので、年長になるまで10円玉のことを乗車券だとおもっていた。このような、食い違いはしょうじうるが、一般に言葉の意味というとき、外延的意味は、もっとも客観的にしやすいものである。普通名詞の外延は、複数の個体からなる集合なのをたいし、固有名詞の外延はある一つの対象のみである。「ねずみ」の外延は、ねずみの全集合だが、「雨宮俊彦」の外延は、今、パソコンの前で、キーをたたいてこの文章をかいているこの人のみである。外延のかんがえを、文に適用すると、「ねずみがすみにいる」の外延的意味は、この文が正しいとされるようなすべての事態の集合ということになる。古今東西、無数にありそうだが、こういう意味のかんがえを真理条件的意味論という。

外延の対になるのが内包である。「ねずみ」の内包的意味は、ねずみの概念である。概念といっても、いろんな側面がかんがえられる。ひとつは、「ねずみ」は、ほ乳類、齧歯類に

属しといった、属性のリストからなる語義的な意味である。もうひとつは、「ねずみ」のイメージである。イメージは、ねずみの像と、不潔、すばしっこい、などといった情緒的色合いとの複合である。イメージのうちの像はプロトタイプに、感情的色合いは言語学でいう含意 (Connotation) に対応する。感情的色合いは、外延指示によって形成される像、語義が指定する属性と他の語との関連、音のひびきや字形の印象などによってきめられる。

以上、四種類の意味をのべた。外延の意味は言葉と外の世界の出来事のインタフェースでの意味である。語義は、WordNet であつかっているような、語と語の関連による意味である。像と感情的色合いは、外延の意味と語義の間にある内的なイメージにおける意味である。

ここまでのなしは、言葉と言葉の関係、環境との相互作用、個人の心理のなかのイメージで、人間と人間の相互作用ははいつてこなかった。言葉の意味でもっとも重要なのは、人間と人間の相互作用によって規定される意味である。カンガルーのとんちんかんな例も、質問にたいする、答えとしては、意味のある応答である。逆に個々の単語の意味を正確に理解しても、発話で相手が自分に何を意味したのかがわからないと、会話はなりたたない。たとえば「ねずみがすみにいるよ」という発話は、ねずみがこわいから、追い払ってほしいという要求かもしれない。あるいは、面白いから、みてみるよというさそいかもしれない。このような、発話の意味は、会話の状況のなかで規定される。発話の意味を把握するためには、会話の状況のなかで、相手の意図を理解し、また、相手に自分の意図をしらせ、と

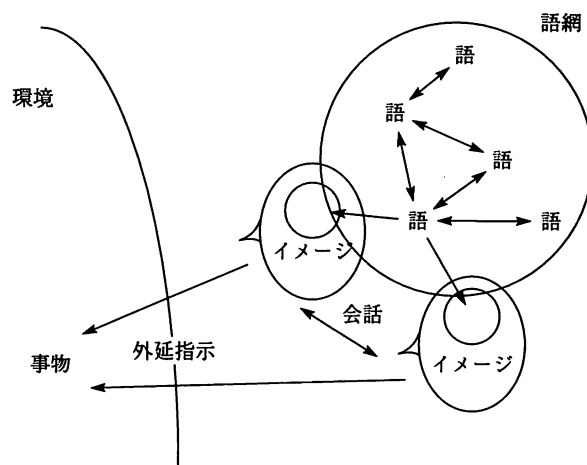


図8 環境・人間・言葉の相互作用と言葉の意味

いうようにしなくてはいけない。

図8に簡単な見取り図をしめしたが、意味は、音声パターンとしての言葉が、他の言葉との関連、環境をかいた人間の心理、人間同士の相互作用のなかにおかれたときに、比較的安定してもつ効果であるといえるだろう。言葉の意味の全体像をとらえることがむづかしいのは、音声パターンとしての言葉がおかれる、他の話、環境、個人心理、他者との関連、社会の付置が複雑で、定式化しにくいためだろう。逆にいうと、言葉に意味が固定的に付着しているようにかんがえるのは、迷信的思考で、言葉の意味は、言葉が状況の付置のなかの種々の相互作用をつうじて生ずるものである。

事物としては認知されても対応する語の存在しない、現象のイメージにおける像と情緒的な色彩は、事物との直接の相互作用によって形成される。逆に、「ベガサス」や「神」、「たたり」のような架空の事物や抽象的な対象は、直接の外延指示はない。この場合、言葉に相当するイメージにおける像と情緒的な色彩は、言葉の語義や他の言葉との関係、「ベガサスの絵」や「神の肖像」「神の言葉とされる本」「たたりの被害者」などの複合的な言葉の外延指示、などから形成される。言葉が存在しない場合の事物のイメージは、直接的相互作用によってきまり、比較的単純である。種々の状況における知覚像から典型的な像が形成され、不快だったり、いやなおもいをするとなマイナスの情緒的色彩が定着するし、逆ならプラスの情緒的色彩が定着する。しかし、人間社会は、直接に経験できない事物や現象にかんする膨大な言葉をもっているし、直接に経験できる場合にも言葉が介入すると、イメージ、とくに情緒的色彩には種々の影響をあたえる。

言葉による、イメージの情緒的色彩への影響は、さまざまな経路をたどりうる。

まず、言葉の響きによる影響がある。「ペプシ」というとなんか、炭酸の泡がはじける感じがするし、「ソフィーナ」などというとなんか女性的でやさしい感じがする。「ゴホンゴホン」とか「そわそわ」などの、擬音語、擬態語などの意味は、どんな言葉を修飾するかとの語義的制約もあるが、イメージの情緒的色彩が中心で、情緒的色彩は、もっぱら、音の響きの印象によっている (Hinton, L., Nichols, J. and Ohala, J. 1995, Kita, S. 1996, Hamano, S. 1998, 田守育啓・ローレンス・スコウラップ 1999)。一般的な語についても、「ちいさい」と「ちっこい」、「ちっさい」、「ちいせえ」などの同義語の意味の差は、言葉の響きの差によっている。この例でいうと、おおきさの順は、「ちいさい」、「ちっさい」、「ちっこい」になり、「ちいせえ」には非難の意味あいがいってくるのではないだろうか。「ちいせえ」に非難の意味がいってくるのは、やや品のないeの音がふたつはいつてく

ることによるだろう。また、おおきさの印象は、おおきい印象をあたえる a 音が減って、促音がはいってくることによるようにおもえる。すこし微妙すぎる例だったかもしれないが、一般の語彙についても、音の響きが語のイメージの情緒的色彩に影響をあたえることはいえるだろう。

つぎに字形による印象がある。小説家の三島由紀夫は、かにかこわくて、字をみるだけで恐慌をきたしたというが、これは漢字の「蟹」の字形が、なんか実物のかにみたいだからだろう。がんというのは、こわい病気だが、これも漢字で「癌」と書かれると、さらにこわい気がする。広告や商品名などでは、文字のデザインにずいぶん気をつかうが、これは外延の意味や語義にかわりはなくても、言葉のイメージにおける情緒的色彩が字形でずいぶんかわってくることをしているからだろう。

複合語の場合は、その語を構成する語基によって影響をうける。たとえば、「キス」にたいする「口吸い」という言葉の露骨な印象は、言葉が「キス」のように単なるラベルではなくなり、語基への分解をつうじて指し示す現象の解説になっているからだろう。婉曲語は、やはり分解と解説を、比喩的な表現などによって、とうまわしに構成することによって、言葉の露骨な印象をよわめたり良い印象をあたえようとするものである。「便所」を「お手洗い」、「死ぬ」を「隠れる」、「質屋」を「一六銀行」などといった言いかえである。「閉会」を「お開き」、「梨」を「ありのみ」、「猿」を「えてこう」などというのは、反対語による婉曲表現である。

日本語の場合は、和語、漢語、外来語の語彙の相による印象の差もある。たとえば、「さじ」と「スプーン」、「じゃがいも」と「馬鈴薯」と「ポテト」などは、外延指示にはおおきな相違がないが、「さじでゆでたじゃがいもをたべる」と「スプーンでボイルしたポテトをたべる」(さすがにイートするとかいうひとはいないようだ。)ではだいぶ印象がことなる。また、「馬鈴薯」というとなんか、アイダホ産ではなく、北海道産のような気がする。一方、「宿」・「はたご」と「旅館」と「ホテル」のように、指示対象のすみわけがなされている場合もある。和語、漢語、外来語の別は、ひらがな、カタカナ、漢字の表記の区別とも対応している。和語は、ひらがなでも、漢字の訓読みとしても表現されるが、漢語は一部の和語化した語をのぞくと漢字で、外来語はカタカナで表現される。このような、語彙の相と表記が複数あり、両者が対応しているといった複雑さをもっているのは、世界の諸言語のなかでも日本語だけの他には例のない現象である。名づけでは、この複雑さを利用し、喫茶店や暴走族など、「蟻巣」とか「亞夢留」などの漢字の当て字をよくつかう。人名

でも、「緑夢」で「グリム」と読ませるなど、日本語の表記は、出鱈目が、いや、でたらめが、野放しである。

最後に、もっとも重要なのが、語がどんな状況で使用されるかである。「遺憾におもう」などという、政治家か官僚の先生方しかつかかわない。ふつうの文章では、「申し訳なくおもう」か「残念におもう」かである。はなしことばでは、「おもう」をつけるのも、もってまわったへんな印象をあたえる。単純に、「ごめんなさい」か「残念だ」である。また、日常の会話で、「私と君との関係性をより肯定的な方向へ発展させていきたい」などという人は、学者でもないだろう。「遺憾」とか「関係性」といった言葉は、官僚や学者の言葉である。語が一般的に使用される、文脈や状況が、指し示す事物はおなじでも、語にある種の文体、あるいは話体の印象を付与するようになる。

以上のように、語のイメージの情緒的色合いは、指示対象が同一でも、音の響き、字形、語構成による連想、語彙の相、文体・話体などの、言葉の領域における複雑な相互作用によって、さまざまに影響をうける。人間の意志決定や行動を左右するのが、語のイメージとくに、その情緒的色合いなので、言葉の網の目をつうじて世界を認識する人間はなかなかやっかいな状況にある。言葉は人間の心にはたらきかける道具だが、その種類と複雑さは、手術道具や大工道具の比ではない。数万種の道具がたがいに関連しながら状況によって、さまざまにつかかわけられているのである。

1.6 固有名詞と名づけ

WordNet には、辞書とことなり、固有名詞は原則としてふくまれていない。バラの品種名などふつう固有名詞としてあつかわれるものも、一部ふくまれているが、これは厳密に言えば普通名詞としてもあつかえるもので、人名や地名などの典型的な固有名詞は除外されている。これは、固有名詞が、名詞の語義の体系にとって、外部の存在だからである。

論理的な定義をいえば、固有名詞とは、外延がただひとつの名詞であるのにたいし、普通名詞は外延が複数の個体の集合からなるものである。たとえば、「雨宮俊彦」の外延はただひとつなので、固有名詞である。「垂水神社」も、外延がただひとつなので、固有名詞である。これにたいし、「心理学者」や「神社」は、外延が複数の個体の集合からなっているので、普通名詞である。普通名詞については、翻訳ができる。たとえば英語に翻訳するとすれば、心理学者は Psychologist、神社は Shrine となる。固有名詞は翻訳ができない。雨宮俊彦を Rainy Shrine Clever Man といったり、垂水神社を Running Water Shrine など

と翻訳してもジョークにしかならない。固有名詞については、音をうつすか、文字種がおなじなら文字をうつすしかない。翻訳できないということは、固有名詞が属性によって語義が指定されないということである。たとえば、「雨宮俊彦」は、かりに茶髪にしても、暴走族にはいっても、キリスト教の牧師になっても、属性をどうかえても「雨宮俊彦」である。同様に、「垂水神社」も、経営方針をかえて、神仏習合にしたり、神社にハーブ園をもうけたりしても、やはり、「垂水神社」である。固有名詞は、ある個体にたいして、いったん命名儀式がおこなわれ、発生的同一性 (Genidentity) がたもたれいてるかぎりにおいて、その属性にかかわらず、ラベルとして付与されるものである。固有名詞を翻訳したり、その語義を定義できないのは、このためである。イギリスの哲学者の J. S. Mill は、固有名詞は外延のみで内包をもたないとした (田中1996)。また、アメリカの哲学者のパスは、固有名詞は純粹の指標記号 (Index Sign) であり、その指示対象を一般的に記述することはできないとした (米盛1981)。これが、哲学や論理学の定説である。

しかし、言語学的にみると、哲学や論理学における固有名詞のあつかいは、どうもおかしい (森田・村木・相澤 1989, 小野1992)。たとえば、外延がただひとつというなら、「太陽」や「月」、「地球」などは固有名詞のはずだが、通常は、普通名詞のあつかいである。逆に、「iMac」や「日産キューブ」、「カルピスウォーター」などの商品名は、外延としての個体の集合は膨大な数だろうが、固有名詞とみなされる。言語学的に言えば、固有名詞は、単一の外延をもつ対象の名前ではなく、属性を共有する、にたような複数の対象のなかから、ある種の個体を識別するための名前である。パソコンや自動車、清涼飲料などは、おおくの属性を共通にする事物の集合の名前である。この集合のなかには、たくさんの種類があるが、属性によって分類することは通常はせず、たがいを識別するだけの名前をつける。人間や神社の名前も、にたような属性を共有するたくさんの事物を、相互に識別するための名前である。したがって、名詞が固有名詞まで、おりた段階では、属性によって名詞を分類し、語義を問題にすることはできない。一方、太陽や月、地球は、識別を必要とするような、にかよった事物の集合のなかのメンバーではない。単一の外延しかないが、属性による名づけの対象となり、語義を固定することができるので、普通名詞としてあつかいすることになる。

以上のようにかんがえると、レヴィ・ストロース (1976) が指摘しているように、普通名詞と固有名詞は連続的な存在であることがわかる。

たとば、人名でも、「一郎」といえば、ふつうは、一番名の男の子である (もちろん三番

目の女の子に一郎とつけるような変人もいるかもしれないが)。また、男の名前、女の名前の区別も、「ひろみ」など、両性につけられる名前もあるが、一般には男の名前か、女の名前かがわかる。さらに、「とめ」とか「きく」というと古い時代の名前ということがわかるし、「亞里沙」などの万葉仮名風の名前なら最近だとわかるなど、時代もおよそ表示している。川田（1988）には、アフリカのモシ族における、個人の属性の表示としての名前がたくさん紹介されている。属性の表示なので、日本語に訳することができる。自分でつける名前としては、「骨は小蟻の手には負えない。運ぶのはあきらめるがよい。」（自分は小物の手にはあまる大物であることを示す）、「石をにても湯気がでるだけだ。」（自分はどのような頑固者だ。なんか漱石のようだ。）など。自分の子どもの名前も、きまぐれな感じにつけてしまう。若い父親が同居している老人へのあてこすりとして、「ヨアブシダ」（理は若者にあり）と名づけたり、「バングノーマ」（力があればいいな）など、など、である。アメリカインディアンも、映画のダンスウィズウルブスでは、「拳をにぎりしめている女」などの名前のシーンがあった。

商品名なども、岩永（1998）が推奨するシステム的なネーミングなどは、属性の表示をふくんでいる。たとえば、BMWなどは、740i、540i、328iなどの名前がついているが、頭の数字がグレード、その次の数字が排気量をしめしている。パソコンでも、Power Mac G3 350とかPower Mac G4 400などのシステム的な名称が採用されている。Power MacはプロセッサとしてPwoer PCをつかっていることを、G3とかG4はプロセッサのジェネレーション、350とか400はプロセッサのクロック周波数を、それぞれしめしている。こういう分析的な名づけではなくとも、旧海軍の船の名づけのように、製品の種類によってちがった系列の名前をつかったようなケースはおおい。旧海軍の例でいうと、大和・武蔵・出雲など戦艦は昔の国名、赤城・摩耶・高雄など第一巡洋艦は山の名前、天竜・利根・最上など第二巡洋艦は川の名前、などである。

以上みてきたように、固有名詞には、識別のラベルとしての機能だけではなく、一時的、局所的で語義の体系にくみこめないとはいえ、対象の分類と属性の表示の機能ももっている。また、固有名詞のイメージ、像と情緒の色合いは、普通名詞とおなじく、音の響き、字形、語構成による連想、語彙の相、文体・話体などの、言葉の領域における複雑な相互作用によってしょうずる。したがって、固有名詞は、外延のみで内包をもたないとはいえない。いえるのは、安定的な語義の体系のなかにくみこまれないということだけである。しかし、「セロハンテープ」や「ウォークマン」などの商品名などは、現在は、普通名詞化

している (天野・関沢・多田・山口 1995)。人名でも、北海道の江差地方にむかし「繁次郎」というひとがいて、非常にいいかげんだが、にくめなかったひとらしい。北海道の江差地方では、いいかげんでにくめないひとのことを「繁次郎」とよぶそうだ。さらには、「繁次郎」をおおよその意味でつかい、「あす繁次郎2時にあうべ」などといったつかいかたもするらしい。ほかにも、「与太郎」とか「権兵衛」などか、普通名詞的につかわれる名前はたくさんある。最近でも、「サッチる」など、固有名詞を一般的な意味につかう現象は、つねにしょうじている。

図9に、森岡(1977)における名詞の階層的体系をしめした。WordNet に似た階層だが、ややおおざっぱで、固有名詞まで階層がのびている点がちがう。森岡は、ロッシュらの研究には言及していないが、ここでの一次名は、ロッシュらがいう基本レベルに相当する。興味ふかいのは、一次名がたんに使用頻度がたかい基礎語彙というだけでなく、「(1)一語基からなりそれ以下の単位には分解できない。(2)知識体系の第一次的枠組みを形成している。(3)造語機能が高く、これを基準にして多くの語を生産する。(4)長い歴史を通じて受継がれてきた語彙で新たに造語することができない。」(森岡1977)といった特徴をもっていることである。名詞の語彙の体系は、その末端に固有名詞の広大な一時的、局所的な領域があり、ここでは、普通名詞の領域を基盤に、語の複合、派生、転用などの語の変換をつうじ、つねに多量の名前が生産されている。これらの名前は、たんなる識別のラベルではなく、名づけるひとの意図が、語形成をつうじて、うけとるひとつたえられ、分類や情緒的な

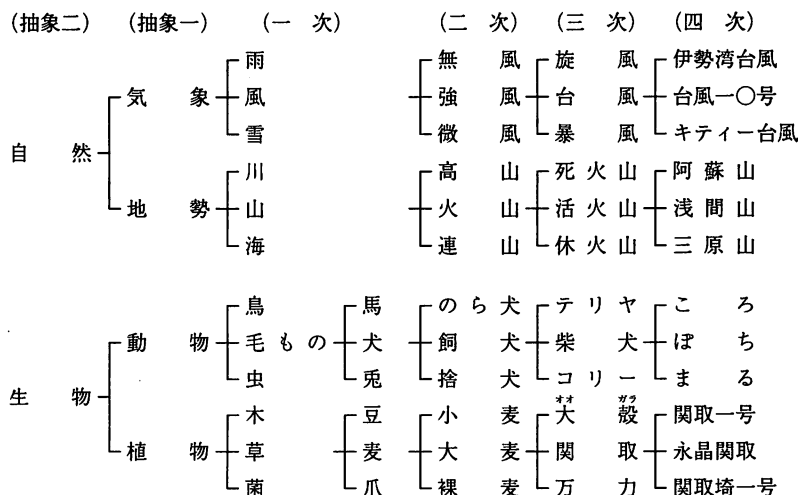


図9 語彙の体系と名づけ

色彩などの意味作用をもつ。そして、そうした意味が一般化したある種の名前は、普通名詞に昇格する。また、普通名詞も、バトカーの「大名行列」や「茶髪」などのように、指し示す対象の世界と言語集団の着目におうじて、新語が形成される。名づけの現象は、こうした、固定的で安定した名詞の体系のなかにおける生成、組み替え、である。固有名詞の領域がもっとも活発な、名前生成と廃語の場だが、普通名詞の領域でも、もっとゆっくりした名づけの現象がたえずしょうじている。語の歴史や発生という長い時間をかながれば、すべての語彙を名づけの結果としてとらえることも可能である。もちろん、そこまで名づけの射程を延長するのは無謀だが、固定的な語彙の体系とそのつどの名づけの現象が連続的で、そこではたらいっている要因や力は共通だと想定してもよいかもしれない。

[参考文献]

- アダマール 1990「数学における発明の心理」みすず書房 (J. Hadamard. 1945 *An Essay on the Psychology of Invention in the Mathematical Field*, Princeton University Press.)
- 天野祐吉・関沢英彦・多田道太郎・山口仲美 1995
「たのしいネーミング百科」三省堂
- 雨宮・木村・藤沢 1993 ソシオンの理論(3), 関西大学社会学部紀要, 25巻, 1号, 63-163.
- ボルヘス 1982「異端審問」晶文社 (Borges, J. L. 1952 *Otras Inquisiciones*, Sur S. A.)
- Collins, A. and Quillian, M. R. 1969 Retrieval Time from Semantic Memory, *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 8, 240-247.
- 出口顯 1995「名前のアルケオロジー」紀ノ国屋書店
- Fellbaum, C. eds. 1998 *WordNet: An Electronic Lexical Database*, MIT Press.
- ガードナー 1987「認知革命」産業図書 (Gardner, H. 1984 *Mind's New Science*, Basic Books)
- グッドマン 1987「事実・虚構・予言」勁草書房 (Goodman, N. 1979 *Fact, Fiction, and Forecast*, Harvard University Press.)
- Goodman, N. 1987 *Of Mind and Other Matters*, Harvard University Press.
- ハッキング 1989「言語はなぜ哲学の問題になるのか」勁草書房 (Hacking, I. 1975 *Why Language Matters to Philosophy?* Cambridge University Press.)
- Hamano Shoko 1998 *The Sound-Symbolic System of Japanese*, CSLI Publications.
- Hinton, L., Nichols, J. and Ohala, J. 1995 *Sound Symbolism*, Cambridge University Press.
- Hiraga, M., K. 1994 Diagrams and Metaphors, *Journal of Pragmatics*, 22, 5-21.
- イアン・アーシー 1996「政・官・財の国語塾」中央公論社
- 今井むつみ 1997「ことばの学習のパラドックス」共立出版
- 岩永嘉弘 1998「ネーミングが広告だ」宣伝会議
- 岩永嘉弘 1999「売れるネーミング買わせるネーミング」同文社
- ヤコブソン・ウォー 1986「言語音形論」岩波書店 (Jakobson, R. and Waugh, L. 1979 *The Soundshape of language*, Indiana University Press.)
- 寿学章子 1979「日本人の名前」大修館
- 鏡味明克 1982 固有名詞 (佐藤喜代治編「語彙原論」所収) 明治書院
- 鏡味明克 1984「地名学入門」大修館書店

- 川田順造 1988「聲」筑摩書房
 木通隆行 1990「音相」プレジデント社
 木村洋二 1983「笑いの社会学」世界思想社
 木村洋二 1995「視線と「私」」弘文堂
 金田一春彦 1988「日本語上・下」岩波新書
 金田一・林・柴田編 1988「日本語百科事典」大修館書店
 国立国語研究所 1964「分類語彙表」秀英出版
 Labov, W. 1973 The boundaries of word and their meanings. in C. J. Bailey and Shuy eds., *New ways of Analysing Variations in English*, Georgetown University Press.
 レイコフ 1993「認知意味論」紀伊国屋書店 (Lakoff, G. 1987 *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.)
 レヴィ・ストロース 1976「野生の思考」みすず書房
 (Claude Lévi-Strauss 1962, *La Pensée Sauvage*, Librairie Plon)
 レヴィ・ブルユル 1957「未開社会の思惟 上・下」岩波文庫 (Lévy-Bruhl 1910 *Les Formations mentales dans les Sociétés inférieures*, Lucien.)
 松井健 1982 動・植物の民俗分類 (合田編「認識人類学」現代のエスプリ別冊)
 松島廣美 1997「新装版 国際ネーミング」日刊工業新聞社
 Miller, G, A. 1998 Nouns in WordNet, in Fellbaum, C. eds. *WordNet: An Electronic Lexical Database*, MIT Press.
 宮原浩二郎 1998「ことばの臨床社会学」ナカニシヤ書店
 宮島達夫 1977 語彙の体系 (岩波講座日本語9「語彙と意味」所収) 岩波書店
 森岡健二 1977 命名論 (岩波講座日本語2「言語生活」所収) 岩波書店
 森岡健二・山口仲美 1985「命名の言語学」東海大学出版会
 森田・村木・相澤編 1989「ケーススタディ日本語の語彙」桜楓社
 中野洋 1998 言語の統計 (長尾・黒橋・佐藤・池原・中村「言語情報処理」所収) 岩波書店
 新村出編 1997 広辞苑第四版 (CD-ROM 版) システムソフト社
 西尾寅弥 1988「現代語彙の研究」明治書院
 丹羽基二 1994「日本の苗字読み解き事典」柏書房
 野内良三 1998「レトリック辞典」国書刊行会
 荻野孝野・小林正博 1999 意味グループでつなごう多言語データ (<http://www.etl.go.jp/etl/nl/synpo99/ogino/Ogikame.htm>)
 大久保忠利 1953「コトバの魔術と思考」春秋社
 小野正弘 1992 固有名詞の性格をめぐって (「文化言語学」文化言語学編集委員会 所収) 三省堂
 大野晋 1999「日本語練習帳」岩波新書
 Osgood, C, E., Suci, G, E., and Tannenbaum, P. H. 1957 *The Measurement of Meaning*. University of Illinois Press.
 ピアジェ 1977「児童の世界観」同文書院 (Piaget, J. 1926 *La Représentation du monde chez l'enfant.*)
 プラトン 1974「クラテュロース名前の正しさについて一」(「プラトン全集2」水地・田中訳 所収) 岩波書店
 Princeton University Cognitive Science Laboratory 1999 WordNet version 1. 6 (<http://www.cogsci.princeton.edu/~wn/>)
 ロッシ 1984「普遍の鍵」国書刊行会 (Rossi, P. 1960 *Clavis Universalis*, Riccardo Ricciardi.)
 ロス・フリスビー 1989「知覚と表象」海文堂 (Roth, I. and Frisby, J, F. 1986 *Perception and Representation*. Open University.)
 佐久間津奈子 1999「赤ちゃんの名づけ事典」同文書院
 菅野盾樹 1999「恣意性の神話」勁草書房

- 清水義範 1996「名前がいっぱい」新潮社
- Sotaro Kita 1997 Two-Dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics, *Linguistics*, 35, 379-415.
- 玉村文郎編 1990「日本語の語彙・意味 下」明治書院
- 玉村文郎編 1996「日本語の語彙・意味 上」明治書院
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ 1999「オノマトペ」くろしお出版
- 田中克彦 1996「名前と人間」岩波新書
- テイラー 1996「認知言語学のための14章」紀伊国屋書店 (Taylor, J. R. 1995 *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press.)
- 豊田国夫 1988「名前の禁忌習俗」講談社学術文庫
- 梅棹忠夫 1983「知的生産の技術」岩波新書
- ウンゲラー・シュミット 1998「認知言語学入門」大修館書店 (Ungerer, F. and Schmid, H. 1996 *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Addison Wesley Longman Ltd.)
- ヴィゴツキー 1963「言語と思考」明治図書
- ヴィゴツキー 1987「心理学における道具主義的方法 (「心理学の危機」柴田・藤本・森岡訳 所収) 明治図書
- Waugh, L. R. 1994 Degree of Iconicity in the Lexicon, *Journal of Pragmatics*, 22, 55-70.
- ワーチ 1995「心の声」福村出版 (Wertsch, J. V. 1991 *Voices of Mind*, Harvard University Press.)
- ウィークリー 1987「ことばのロマンス—英語の語源—」岩波文庫
(Weekley, E. 1912 *The Romance of Words*, John Murray)
- ウィットゲンシュタイン 1976「哲学的探求」大修館書店
(Wittgenstein, L. 1953 *Philosophische Untersuchungen*. Blakwell.)
- 横井恵子 1997「ネーミングの法則」実業之日本社
- 米盛裕二 1981「パースの記号学」勁草書房
- 吉村公宏 1995「認知意味論の方法」人文書院

—1999.12.14受稿—